

からかい上手になりたい
い神野めぐみ

暮影司

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

エロマンガ先生1巻によると、神野めぐみの男の好みは、年上で草食系の男の子。背はあんまり高すぎない、髪は染めてない、スポーツマンでもなく、大人っぽくて大人しい人。

……それ八幡じゃん!?じゃあ書くしかないのか、クロスオーバー……!?
からかい上手の高木さんに憧れる神野めぐみが比企谷八幡をからかおうとするお話。

目次

自己紹介とメイド服	1
間接キス	10
相合い傘	18
シヨツピング	27
パンケーキ	41
心理テスト	55
はじめてのLINE	63
デート直前	74
バースデープレゼント	80
長電話	92
人生相談	102
麻雀	111

夏祭り	121
二人羽織	133
ハロウィン	142
学園祭	149
初詣	160
お花見	170
ユーチューバー	178

自己紹介とメイド服

今日もまた、来客のない奉仕部の活動を終え、愛しの我が家に帰ってきた。

ぼっちの俺にとって真の安息が訪れる、はずだった。

また、来てやがるのか……。

玄関に最近よく見る靴があった。

小町の友人、神野めぐみのものだ。

なんでも交友関係が異常に広く、やたらめったらお友達がいるらしい。俺の真逆の生き物といつてもいいな。

それにしても足立区からわざわざ千葉までやってくるとはずいぶんと仲の良いこと
で。

しかし、めぐみがいるのか。

思わずため息が出る。

こいつがいると休まらないんだよな。

自己紹介の時点から苦手極まりないやつだった。

初めて会った時を思い出す。

「あ、小町ちゃんのおにーさん。こんにちは」

「お、おう……」

「なんなの？ この娘はなんで自己紹介でこんなに近寄ってきて上目遣いで笑顔を向けてくるの？」

「どうしようもない私に天使が舞い降りたの？ わたてんなの？」

「しかしまあどうやら小町より年下だし、いくら可愛くてもな。」

「するとめぐみはくりくりつとした大きな瞳を見開いたまま言った。」

「あれ？ あたしに一目惚れしないなんて珍しい人ですね？」

「うわー。」

「この娘そういうこと言っちゃう系かー。一色でもそこまで酷くねえぞ。」

「惚れねえよ。小町の方が可愛いからな」

「うわつ、シスコンだったんですね!?! 気持ち悪っ!」

「あのね、自己紹介しただけで気持ち悪いとか言うのやめてもらえる？ 言われ慣れて

ても傷つくんですけど?」

「やっぱり言われ慣れてるんですねー」

「うんうん、と勢いよく頷くめぐみ。追い打ちかけてる自覚あるんですかね……?」

「それだけ妹のことが好きだと、やっぱり妹の下着でおちんちんしごいたりするんです

か？」

「は!？」

なに? なに言ってるのこの娘?

小町より年下の女子中学生が言う言葉じゃないよね? 由比ヶ浜でもそんなにビツチなこと言わないよ? あいつ実は全然ビツチじゃないけど。

なんなら三浦でも顔を赤らめて恥ずかしがっちゃうレベル。なにそれあーしさん可愛すぎ。

「お前、女子中学生がおちんちんとか言うのやめたほうがいいぞ」

「え? J Cはみんなおちんちん大好きですよ?」

この味は、嘘をついている味だぜーッ!

って汗なんか舐めなくてもわかりますよ、ええ。

「いや、そんなわけないから」

「なんでですか?」

きよとん、と目を丸くして頬に人差し指を当てつつ小首をかしげるめぐみ。

残念だが、こっちはあぎとい年下に慣れてるので、うっかり惚れたりはない。3年前ならイチコロだったねこれ。

「その理屈だと小町もおちんちん大好きってことになるだろう」

「そうですよ?」

左にかしげてた顔を右に倒しながら、無邪気に答えるめぐみ。ほんとあざといなこいつ。

そうですよって。なに当然の如く言っているの。

小町がおちんちん大好きとか、お兄ちゃんは許しませんよ!?

しかし確かめようにも小町に「お前、おちんちん大好きなの?」とか聞いたら家族会議になって俺と親父が怒られる。親父まじ可哀想。俺はともかく親父のためにもやめとこう。

「じゃあ、お前は俺のおちんちんに興味あるの?」

ないだろ、という確認のために言っているんだからね? 俺は小町より年下の女子中学生におちんちんをどうこうして欲しい変態じゃないからね?

「えっ? も、もちろんありますよ」

薄い胸を反らして強がるめぐみ。薄い胸と言っても雪ノ下さんよりはありそうですね!

しかしここまでわかりやすく強がっているんだ、もう勘弁してやろう。年下をいじめ

る趣味はない。年上にいじめられる趣味ならある。

「はいはい、そうですね」

話を打ち切ったつもりだったが、めぐみは頬をぷくぷくと膨らませ、抗議してきた。

「ちよつと、今お子様扱いしてますね」

「そりやそうだろ、実際お子様なんだから」

スクールカースト上位のリア充美少女でも、さすがに高校二年生から見た中学一年生はお子様だ。

年上の友達の家で初めて会った更に年上の高校生の異性なんて、逆の立場だったらまともに見ることも出来ないだろう。こいつは一所懸命に背伸びをしている可愛げのあるお子様だ。

ぼんぼんと頭を撫でてやる。

「ひああ？ ううつ、なんで優しくされているんですかっ！ 今、あたしが女の魅力で翻弄するところですよっ？」

顔を真っ赤にして抵抗している。翻弄するっていうのは雪の下の姉みたいな悪魔的大人の魅力がある女性がやることだ。ちゃんちゃらおかしい。

「よしよし、小町と遊んでくれてありがとな」

「むうううう！」

頭を撫でられながら顔を真っ赤にして怒っているようだった。

まあ、お子様つてのは子供扱いされるのが嫌なもんだな。

かわいい、かわいい。

——つていうのがめぐみが初めて来た日の出来事だったのだが。

あれからちよくちよく来るようになったんだよな。

どんだけ小町のこと好きなんだよ。俺も好きだからよくわかる！ 毎日会いたいよ

ね！ むしろトイレやお風呂でも一緒にいたいまである。

「おかえりなさいませ、ご主人様」

「なんでお前が俺の家でメイドの格好してるの!？」

めぐみはメイド服を着て玄関前で待ち構えていた。とても良く似合っている。黒髪の清楚なメイドもいいけど、ギャル風ポニテのメイドも悪くはない。

「おにーさんの本棚を見る限り、こういうのが好きなんだろうな—と思って」

そりやエマとかシャーリーとか大好きですけど！ なんて勝手に俺の本棚分析し

ちやつてるの？ うちのメイドがウザすぎるの？ 勝手に俺の部屋に入るのはイケな

いと思います！

「まあ—こんなところにいつまでもいるのもなんですし、こちらにどうぞ」

にこやかな表情でリビングに誘導される。ここ誰の家なんだっけ？

「では、そのソファアにどうぞ」

ささ、こちらにとばかり手でソファアに座れと促される。我が家のソファアを薦められるのって初めてだな。

何を企んでいるのかわからんが、大人しく言うことを聞いてやる。

「お隣失礼しますね〜♡」

わざわざくつついてくるように座るめぐみ。キャバクラみたいだな。行ったことないけど。メイドさんが隣りに座ってくれるなんて夢シチュエーションですね。

俺の目の前にカツプを置き、そこに紅茶を注いでくれる。何がしたいんだコイツは。ぴったりとくつついてメイド服越しに体温が伝わってしまう。近い近い。ほんのりとシャンプーの匂いがして女の子だと意識してしまう。なんか戸塚に似た香りだな。あれ？　じゃあ男の子なの？

しかし左腕の感触からすると、やっぱり女の子だった。

「どうですか？　あたしの魅力にメロメロなんじゃないですか？」

「そうだな。メロンメロンってことはないが、思ったよりは胸があるんじゃないか？」

「ひゃ!?!　お、おおお、おにーさん!?!」

胸を押し付けてきているのかと思ったが、触られてると思って恥ずかしがるとかよくわ

からんやつだな。

「翻弄したいだけで、実際にエロいことをされたらこの動揺っぷり……。」

「はーん、これはニセビッチだな？」

「お前知らないのか？ 男子高校生はみんなおっぱいが大好きなんだぞ？」

「知ってますよ！ そりやそうでしょうとも！」

「おちんちんが大好きな女子中学生とおっぱいが大好きな男子高校生。これはWINWINの関係が築けると思わないか？」

「えっ？ それって、どういうことですか？」

「俺がお前のおっぱいを触って、お前は俺のおちんちんを触るってことだよ」

「うんうん、素晴らしい。みんな幸せ。ハッピーラッキーみんなにとーどけ！」

「俺の提案を受けたためぐみは顔を茹でダコのように赤くしてがばりとソファから立ち上がり、リビングから2階へと叫んだ。」

「きゃー！ 小町ちゃーん！」

「ちよ、おまつ！」

「ここで小町を呼ぶとかズルすぎるだろ！」

「ジト目で登場した小町に」

「俺はあくまでお互いのニーズにあった最適のソリューションを提案したにすぎずそれ

はコンプライアンス的に決してですね！」

と、ろくろを回すようなポーズをとりつつ女子中学生にセクハラした言い訳をする俺。

わあ、意識高そうですね。地面をえぐって地球の裏に到達するまでである。ブルの人間こえますかー!?

「どうせめぐみちゃんがお兄ちゃんをからかおうとして失敗したんでしょ。小町だいたいわかるからいいよ」

わー、流石小町。俺の妹とその友達は修羅場にならない。涙目のめぐみをよしよしと頭を撫でる小町を見て、安堵する。

しかし、なんでまた俺をからかおうなんて思ったのこイツ？ 高木さんにでも憧れてるの？ 設定上は同じ中学一年生か。でも、高木さんだったら俺もドキドキしちゃうだろうな。

でもありや西方君のこと好きだからやってんだっつーの。
俺なんかをからかおうなんて、神野めぐみは間違っている。

間接キス

玄関を開けると、我が家のものではない見知った靴があった。

おいおい、また来ちゃってるのかよ。

「ただだけ小町のこと好きなんだ、あいつは。小町のプティスールなの？ マリア様がみてるの？」

「やれやれ、一色いろはにあざといからかわれかたをして、あやうく俺の事好きなのかと勘違いして来たばかりなのに。」

「また、あざとい後輩の相手をするのかよ。」

「ただいま」

「誰に言うでもなく、ぼそりと帰宅を告げたつもりだった。」

「すると俺が見ていた革のローファアの持ち主が返事をしながら出迎えてきた。」

「あ、おにーさん、おかえりなさい。お邪魔してマース」

「なに、俺のこと待ってたの？」

「そういうのまだ早いですしマジありえないんで戸塚くらい素直な可愛さになってから出直してくださいごめんなさい。」

なんてな。うっかり照れ隠しで一色のようなことを考えてしまったが、これやつぱり照れてるんじゃないの。ソースは今の俺。

神野めぐみは圧倒的な社交力を持っていて友人が非常に多く、自他ともに認める美少女で、スクールカーストの最上位に位置する。通常では縁のないタイプの女の子だ。ま、そもそもどんな人間とも縁がないんですけどね。

そんな女子からお出迎えされると妹より年下でも少し意識してしまう。

「お、おう……いらっしやい」

気恥ずかしさを誤魔化すように頬を掻きながら返事をする、玄関前にやってきた神野めぐみはにこぱーっと満面の笑みを浮かべ、ポニーテールを揺らしつつ言った。

「おにーさん、喉乾いたでしょう？ はい」

彼女が俺の前に出したのは、缶のドクペだ。どこの鳳凰院凶真さんですかねえ？
とりあえず受け取ると、重さから半分くらい飲まれていることがわかる。

よく見たらプルタブも開いている。

「これ、お前が飲んでたんじゃねーの」

「そうですよ？」

「じゃあなんで俺に」

当然の疑問を投げかけると、なんでもないような顔で

「喉乾いてるかなーっと思つて♪」

とだけ言つた。

——妙だ。

カンカン照りの夏の日、でもないのに。

缶は少しぬるくなっている。

たまたま今飲んでいて、俺がのどが渴いているからあげた。というシチュエーションには程遠い。

なんというか、まるで——半分飲んだ缶ジュースを俺に渡すために待ち構えていた、ような感じだ。

なぜ、そんなことを？

訝しむように彼女を見る。

子供がいたずらをしているような、楽しくて仕方がないという顔。

唇の端が上がっている。

よく見るとリップをつけているのか、少し艶やかだった。

改めてドクペを見ると、飲み口に何か付いている。指で少し触つてみると、それが彼女の唇に塗られているものと同じであるとわかった。

ああ、これに口をつけると間接キスになるんだな。そのことを否が応でも感じる。

「ど、どうしたんですかー、おにーさん？ 飲まないんですか？」

動揺を隠しているように見えた。

こいつ、まさかわざと間接キスさせようとしてんのか？

「いや、これ、俺が飲むと間接キスにならないか？」

「あ、あー、そうなっちゃいますかねー。あたしは別に気にしませんけどー」

気にしてなかったらそんなにワチャワチャしねーだろ。神野さんは不器用。

しどろもどろになりながら、目線を俺とドクペと床と天井にぐるぐる回転させる。

ランニングホームランでも打ってんのかな。20点くらい入ってるぞ。

ゆつくりと口を缶に近づけると、めぐみは目を見開いてグツと拳を握る。

そんなに見られたら飲めないんですけど……。

缶を離すと、ほっと安心したように肩を脱力させた。

また、缶を口に近づけると前のめりになって凝視してくる。

意識しすぎだろ……。

これが一色いろはだったら、例え間接キスであつても砂糖とスパイスをぶちまけたような甘く刺激的な印象を与えてくるだろう。

しかし、これは……もうお子様つて感じだ。今どき、ちやおやりぼんでももつと大人よ？

リアクションを楽しみながら、缶を近づけたり離したりしているうちにやら悪戯心が芽生えてくる。まるで子猫と猫じやらしで遊んでいるような、そんな感覚だ。カマクラも子猫のときはもつと俺に懐いてたんだよなあ。

俺はぺつと舌を出した。

一瞬、クエスチョンマークを頭の上に浮かべるめぐみだったが、その状態で缶を近づけると顔を真っ赤にして慌て始めた。

「なつ、ちよつと何してるんですか!？」

「いや、別に。ドクペ飲むの久しぶりだから、ちよつと舐めようかなつて」

「舌を出しながら近づける必要ありますー!？」

「別にいいだろ。なんか問題あんの?」

「な、ないですけどー? 別におにーさんがどうやって飲むうと関係ないですし」

「だろ。なら問題ないな」

俺は、舌を高速で出し入れしたまま、ドクペの飲み口に近づける。ヒツキーはイジリーに進化した!

イジリー、なめまわすだ!

「わつ、わつ、わつ? なんですかそれ? 変態ですか!？」

思ったとおり、脚をジタバタさせて慌てふためくめぐみ。こうかはばつぐんだ!

俺は缶を猛烈にねぶり、舌で攻め、これでもかと舐め回した。

「きゃー！ きゃー!!? 何やってるんですか」

顔を両手で隠し、指の合間から俺を見ている。

「別に、缶ジュースの飲み口を舐め回してるだけだ」

「なんでそんなことするんですか!?!」

「あー、いつもの癖だな。マックスコーヒーは飲み口まで甘いから」

「そ、そうですか」

俺の無茶な言い訳を信じたようだ。所詮中学一年生だよな。

つつても二年前の小町だったら騙されないけど。

「なぜかこれはレモンみたいな味だけだな。初めてのキスみたいな」

「わっ!! わわっ!!」

心臓に近い部分の胸を抑えて、内股になるめぐみ。

もうドキドキしすぎでしょ、この娘。どつきりどつきりドンンでしょ。

間違いない、めぐみは間接キスで俺をからかおうとしたが、完全に墓穴を掘ったということだ。

さつき一色に翻弄された分を、取り返させてもらうかな。

舐め回したドクペをめぐみに向ける。

「妙に慌てるな。これでも飲んで落ち着けよ」

「えっ!? ええっ!?」

「まー、俺と間接キスになっちゃうけど、気にしないんだろ?」

「も、もちろんですよ」

缶を受け取るめぐみ。

両手で缶の飲み口を見ながら、口を真一文字に結び、顎の下に梅干しを作っている。

いじめすぎたか?

もう勘弁してやろう。

「なあ」

もういいと告げようとした矢先、めぐみは缶を一気にあおった。

つぶられた目は何かを覚悟したかのようにぎゅっと閉じられ、頬には赤みが差している。

ぷはっ、と缶を離れたためぐみの桜色の唇は濡れて、一滴が垂れようとする舌を舌でぺろりと舐め取った。

ゆっくりと開けられた瞳はとろんとして、普段の快活な表情とは違った色気を感じる。

まるで俺が直接彼女の唇を奪ったかのようなリアクションなんだが……。

彼女のあまりの表情に、俺まで口づけを交わしたような錯覚を覚えてしまう。

思わず視線の上に泳がして、頭をぼりぼりと掻いた。

「おにーさん、どきどき、したんじゃないですか？」

「ちよつとだけな」

どう考えてもお前ほどじゃねえけどな。

めぐみの表情を伺うと、

「んふふ、うーんなこととどきどきするなんて、お可愛いこと」

手を口元に寄せ、ドヤ顔で勝ち誇ったようにそう言った。

かぐや様ごっこがしたかっただけかよ。

全く、お可愛いことだ。

そこでリビングのドアが開いていることに気づく。

玄関先の俺たちをずっと生暖かい目で見守ってたらしき小町と目が合った。

——今日の勝敗、比企谷小町の勝ち。

相合い傘

「なんでお前がここにいんの……」

「あ、おにーさん、待ってたんですよ〜?」

うちの高校の下駄箱で、なぜか神野めぐみは待ち構えていた。

だから足立区から千葉まで、まあまあ遠いのになんているんだよ。

「あれー? つべー、二人知り合いなのー?」

いや、むしろなんで戸部と普通に知り合いになってんの? こいつのコミユカどうなってるんだ。

「じゃ、戸部先輩さよなら〜♪」

「あ、おう! またなめぐみっち〜」

話の途中だったろうに、めぐみはもう用はないとばかりに戸部を扱った。こいつ、戸部への対応が一色と同じだな……。

適当に低い位置で手を振っていためぐみは、くるりと俺の方にターンして、片目をつぶって微笑む。

「一緒に帰りましょうよ、おにーさん」

「いや帰らないし……」

「なんでですか!?!」

「一緒に帰つてるところを見られて噂とかされたら恥ずかしいし……」

このセリフはとりあえず誘われたら断るといふぼつちの習性によるものであり、特に俺がめぐみに対して好感度が低いからではない。あのときの詩織の顔は、今も俺の心の柔らかいところを締め付けている。だからみんな虹野さんに転んじやうんだよ。

渾身のモノマネをしたが通じないようで、キョトンと小首をかしげるめぐみ。

世代的に知らないよな。まあ、俺も世代的には知らないはずなんですけど。

「なんですかそれ? 美少女と一緒にいると通報されると心配ですか?」

まー、その可能性の方が高いけどね……。

それにしても自分のことを美少女って言い切るタイプが俺の周りには多すぎじゃないですかね。

まあ、実際に可愛いんだからありがたく思うべきか。どうせならもつとT O L O V E なる展開を希望したい。特に戸塚とか。うっかり股間に顔を突っ込んでんじやったら、実は付いてなかった可能性がある。はがないの幸村みたいなパターン、あると思います!

「通報されても、ちゃあんと説明してあげますよ?」

わー、優しい。一色とかろくに説明しないで笑い転げそうだな。

もし新垣あやせが相手だったら通報されても構わない。その覚悟はどうに出来ているが、彼女は千葉にいるはずなのにまだ会えていない。小町が読モ始めたらウチに来たりするんでしようか!?

「そりゃ、どうも。でも一緒には帰らない」

「なんでですか?!」

「そもそも、俺は自転車通学だし」

「え〜?」

ギャルゲーやアニメでは家まで歩く描写もよくあるが、本当は小中学校までが普通だ。市町村内の近所の学校に通うものと、都道府県内で自分にあった学力で選んだ高校では大きく異なる。

歩いて高校に通ってるやつなんてほとんど居ないだろう。

よって一緒に男女が帰るシチュエーションなどそうあるものではない。俺がぼっちで特殊だからじゃないんだよ、普通だ普通。

「じゃ、そういうことで」

「待って、待ってくださいよー。でもでも、雨降りそうですよ?」

そう言って、あたふたと俺を呼び止めつつ、人差し指を天に向けるめぐみ。サタデー・

ナイト・フィーバーみたいだな。そこまでじゃねえか。

「いや、雨降つても関係ないし……」

「駄目ですよお、片手で傘差すのは道交法違反です。私が傘持つてあげますから、後ろに乗せてください。ね？」

「二人乗りも道交法違反なんですけど……」

「えっ、でもジブリの甘酸っぱいやつでしてんじゃないですかー。私ずっとやってみたかったんですけど」

「耳をすませばのことね。なに、あの二人に憧れてるの？　そういうのは憧れの男子とするもんだぞ」

「だから……」

セリフの途中で固まってしまった。なに？　DAKARA？　俺はポカリ派なんだけど。更に言えばスポーツ中もマツ缶でいい。スポーツしないけど。

表情を伺っていると、俺の視線で生き返ったかのように突然動き出した。俺の目は死んでるのにね。ほっとけ。

「ちがっ、違くって、今日は二人乗りじゃなくてあいあい……」

また、途中で固まった。何、WINDOWS95なの？　メモリ足りてる？

アイアイって何？　ブルブルブルアイアイ、ブルーベリーアイ？　なんか一時期狂っ

たようにコマージュシャルしてたよねアレ。主にアニメの前後で。

「えーっとー、ところでおにーさんは傘持ってますか？」

「なんだ、唐突に。俺は念の為いつも折りたたみを持ってるんだが」

「あ、あー、そうなんです。私うっかり傘忘れてここに来ちゃってー。だからおにーさんの傘に入れて欲しいなーって」

妙だ。確かに雨が降りそうにも見えるが、まだ降ってもいないのにわざわざうちの学校に寄るのは不自然すぎる。俺がコナンくんだったらこの時点でめぐみを犯人だと思っちゃうまでである。

しかしまあこの状況で置いていくわけにもいかない。

俺が自転車を押して歩きだしたことを、許可と受け取っためぐみはとてつと近寄ってくる。

「じゃ、帰りましょっか」

「お、おう」

ぴったりと寄り添って歩くめぐみ。

なんだ？ まだ傘も差していないのに、この時点で相合い傘みたいな距離感なんだけど。

あいあい……ガサ？

まさかとは思うが、こいつ……。

右側で自転車を押している俺の左側は十分なスペースがあり、こんなにくつつく必要はない。

すつかり相合い傘を始めているような気持ちでもない限り。

「まだ降りませんねえ」

そう言いながら天を仰ぐめぐみ。まるで天気予報で雨が降ることを知っているかのよう。

まだだ、まだ勘違いという可能性がある。

「あ、ぼつぼつと降り始めましたね〜♪」

待ち望んでいたかのように、嬉しそうに報告してくるめぐみ。

「あ、すまん、折りたたみ持ってると思ってたけど、やっぱ忘れてたわ」

「えっ」

「悪いけど先帰るわ、小町に迎えにこさせるよ」

努めて平然とそう言うのと、めぐみは、わざとらしくぽんと手を打った。

「あー、あー、実は私、傘持っていました」

——やっぱりな。

どうやら俺の勘違いじゃなかったらしい。

折りたたみにしては大きい傘をバッグから取り出す。おいおい、まだタグが付いてるぞ。買ったばかりだつてバレちゃうじゃないかよ。

嬉しそうに傘を差すと、

「どうですか、相合い傘になっちゃいましたね？」

と言った。

なつちやつたというか、相当頑張つてここまで持つてきたよね？

「ああ、そうだな」

そう答えると気に食わないのだろう、リスのように頬を膨らませて眉根を寄せる。

「ずいぶんと無反応じゃないですか、こゝんなにくつついているのに」

傘を差す前からずつと同じ距離なんだよなあ……。相合い傘をする気持ちかはやりすぎて先走つちやつてたのよ君。

傘を差してから距離が近づくんだよアレ。最初からくつついてたら「濡れるだろ、もつと近づけよ」みたいなセリフが発生しないのよ？

「ちよーつと左腕貸してもらつていいですかっ？」

「いや、自転車は両手で押さないと危ないし」

「そういうの、いいですから」

さつきは道交法違反がどうのと言つてたくせに……。

左腕を開放すると、すぐにその腕を抱きかかえて、俺の脇を通した右手で傘を持った。
「んふふ〜♪」

満足気に笑うが、その行動も読めてるんだよね……。

「どうですか、おにーさん、意識しちやってるんじやないですかー？」

「まあな」

「えへへ♡」

わかっても、左腕に胸が当たつてれば意識せざるを得ない。それを指摘して通報されても困るから、これはこのままの状況を我慢するしかないな、うん。

「うわー、歩き方ぎこちなくい。こういうの慣れてないんですね〜？」

「あ、ああ、まあな」

めぐみは俺の返事に満足したのか、終始機嫌が良さそうだった。

片手で自転車を押してるから歩きにくいだけなんですけどね……。

慣れてないという意味では妹以外の誰かと歩くこと自体が慣れていない。

満面の笑みで鼻歌でも歌いそうな勢いだけど、これで俺をからかっているつもりなのか？
「なんとというか、陽乃さんに比べたら兎戯に等しい。あれは相手が悪すぎるか。」

「は、ふあ、八幡くんったら、きんちよーしてるんだー、かわい〜」

自分が顔を真っ赤にして、一生懸命に俺をからかおうとしていた。無理して下の名前

言おうとして囁んでるし。

しかしまあ、ここまですからかうのが下手くそだと、可愛いと思ってしまう、な。

俺たちは家に帰るまでゆっくりと、一つの傘を差して、自転車を押しながら歩いていく。

雨は少ししか降ることはなく、早々に晴れ間が見え始めていた。

めぐみは雨が止んだことに気づかず、俺の家につくまで傘を閉じることはなかった。

シヨツピング

「お兄ちゃん、ちよつと付き合つてよ」

「そうか、ついに兄妹から恋人同士になるのか」

「ちよつとつて言つてるでしょ？ それに私達は恋人同士よりも深い関係だから。あ、今の小町的にポイント高い♪」

「はいはい」

いつものように兄妹漫才を繰り広げる俺たち。妹のいない男子諸君が見ていたら嫉妬で怒り狂つてしまうに違いない。高坂京介も小町みたいな妹が欲しかっただろうよ、少なくとも5巻くらいまでは。

「で、どこにつきあえばいいんだ」

「まあまあ、ちよつとお買い物だよ」

この場合のちよつとは絶対ちよつとではない。

しかしわかかっていてもどうしようもないことは世の中よくあることだ。妹のわがままとか、上司の間違った命令とか。働きたくねえ……。

「え、電車乗るの？ 買い物だろ？」

「買うの、水着だから」

水着かよ。水着を選ぶのくらい彼氏と行けばいいだろ……なんて思わないよ絶対。

そんな男がいたら殺す。本当に殺すと問題があるから社会的に殺す。通学カバンにはやはちの薄い本をねじ込んでやる。俺も傷つくが、諸刃の剣を使用しても殺る。

脳内で小町の水着きせかせかパーティーというミニゲームを妄想していると千葉駅についた。スク水は八幡的にポイント低かった。

「あれ、どこいくの」

「乗り換えだよ。可愛い水着買うんだから千葉じゃ買えないでしょ」

「おい、千葉県民に謝れ、いや、せめて千葉市民に謝れ」

「はいはい、めんごめんご。お兄ちゃんの千葉愛はわかったからさっさと総武線乗るよ」
やっぱりちよつとじゃなかったぜ。まだ想定範囲内だ。ちよつと驚いちゃったけど、アキバくらいまでは千葉のものと言っても過言じゃない。埼玉県民も池袋までは埼玉だと思ってるんだろ？ そりやちよつと凶々しいぜ、赤羽くらいまでにしてあげ。でもそんなこと言うと千葉県民は小岩までで我慢しろって言われちゃうかも。

脳内で埼玉県民とバトルしているとアキバについた。降りようとすると、小町に袖を引つ張られる。

「まだ降りないよ。なんでアキバだと思ってるの？ 水着買うんだよ？」

言われてみればそうだな。水着のフィギュアを買うんじゃないかと水着を買うのだった。

え、じゃあどこいくの……。

ていうかなんで教えてくれないのかしらん。

中野まで行くのかと思いきや、なぜか代々木で降りようとする。アニメーション学院に行っても水着は売ってないと思うんだけど？

向かった先は改札ではなく山手線ホーム。もうわからん。俺はカーズのように考えるのをやめた。

すると意外にもすぐに降りるよう背中を押される。

げ。駅名を見て思わず目が腐る。

ちよつと？　ここはアウエイすぎるんですけど？

「おい、俺はここはちよつと」

「はあ？　今どきJCが水着買うなら原宿に決まってるじゃん」

「何そのセリフ。きりりん氏なの？　どうせなら直葉みたいな妹がいいんだけど？」

「何気持ち悪いこと言ってるの、いいからさっさと来る」

袖を引つ張られながら、きやりーぱみゅぱみゅみたいな街を連行される俺。龍が如くみたいな街のほうがよくぼど気が休まるんですけど。その辺のギャルと目が合ってバ

トルに突入されたらどうしよう……。ふええ、怖いよう……。

「あ、おにーさん、待ってましたよー」

そこには原宿がとでも似合う女の子が待ち構えていた。つまり俺は苦手だ。

クレープをかじりながら俺に手を振るのは神野めぐみ。小町より2つ年下の友人で最近妙に会うことが多い。

彼女は一生懸命オシャレをしてきている若い女子達の中にあつてもひとときわ目立つ。スクールカーストの最上位にいるであろう友達たくさんのリア充美少女だ。

「なんでお前がいんの？ いや、俺の高校にいるより不思議じゃないけど」
「なんでって、私が水着を買うのを手伝ってくれるんですよね？」

きよとんと目を丸くするめぐみ。謀ったな、小町！

真意を聞こうとするが、すでに忍法雲隠れの術を使われていた。どうなつてんだつてばよ。

「あ、おにーさん、私の水着姿を見るからつて動揺してるんですね？」

ぷぷぷと言わんばかりに指先を口元に当てて、ニヤつくめぐみ。動揺してるのはそういうことじゃないのよ？

西武ドームのライオンズスタンドに放り込まれた、マリーンズファンのような心境だからなのよ？

「まー、わかりますけどねー、ドキドキが隠せない気持ち。うふふ、私はただ水着を選ぶのに男性の意見も聞きたいなーって思っただけなんですけどー」

「だったらこんな遠いところまで俺を呼び出さないでもらえる？俺は君の召喚獣じゃないのよ？」

「まあ、いつも千葉まで来てもらってるわけだし、たまにはいいか……。別に俺が呼んでるんじゃないけど。」

頭をぼりつと掻きながら、現状を諦める。八幡、諦めるの得意。

「で？水着買うんだろ？さっさと選ぼうぜ」

「あたしの水着姿を一刻も早く見たいからですか？」

ん？と耳横の髪束を触りながら問いかけるめぐみ。

「いや、早く帰りたいだけなんだけど」

「ふう〜ん？」

見え透いた照れ隠しですね、みたいにニヤニヤしているけど、俺はマジでそう思ってるんですよ？

めぐみはゴテゴテしたケーキみたいな店に入っていく。俺には何の店なのかもわからん。

置いてあるものは服のようなものとかメガネのようなものとかアクセサリらしき

ものとか、うんやっぱりわからん。諦めよう。八幡、諦めるの得意。

「こんにちは」

「こんにちはは、今日は水着を見に来たんです」

「そうなんだ、上の階に新作のコーナーあるからどうぞー、彼氏さんどうぞー」

え、なんで店員タメ口なの？

お前らいつの間にか友だちになったの？

「おにーさん、彼氏と間違えられたからってあたふたしすぎですよ？ んふー」

いや、あたふたしてる理由が違うんだよなあ。お前らの会話にあたふたなんだよなあ。

彼氏ってあまりに似てないから兄妹に見えなかっただけだろ。小町みたいにアホ毛ねえし。

店員もお似合いだと思っと思ってないと思うよ？ レンタル彼女だと思ってるまである。

大体、なんで嬉しそうな？ 一色だったら「彼氏に間違えられたからってワンチャあるかもしれないとか調子にのったら可哀想なんで今のうちに断っておきますごめんなさい」とか告白してないのに振られるところだよ？

困惑している俺を尻目にずんずんとダンジョンの奥に行くめぐみ。俺はまだレベル上げしないとそっちに行けないよお……。

新参者のMMORPGプレイヤーの心持ちでいると、中二階に上がる黒い鉄の階段の途中で振り返ったためぐみがまたニヤニヤしている。

「んもー、あたしの水着姿を見るのがそんなに恥ずかしいんですかー？」

そういうことにしていいから一人にしないで欲しい。

ぼっちの俺がぼっちを怖がるくらい恐怖の場所だ。

「ちよっ、距離近くないですかっ？」

触れるか触れないかの距離に近づくと、俺の顔を見上げたまま焦るめぐみ。

二人パーティーみたいにすぐ後ろについてないと不安なんだよ……。

千葉のショッピングモールですら女子の行く店に入ってるのは周囲の目が気になって仕方がないのに、原宿の女子向け水着売り場なんて存在しているだけで通報されかねない。

「いや、そのすまん、こういう場所慣れてなくてな」

「あー、ですよねー？　じゃあ、こうしちゃいますね♡」

そういうと腕を絡め取ってくる。こっちから近づくとやたら慌てるわりに自分からは距離を近づけるのは平気なのな……。

店内でこんなバカツプルみたいな真似はごめんなんだが、状況的にはこの方が楽だ。

通報されないし。

階段を上がって少し奥へ行くと季節モノの売り場なのだろう、トロピカー恋してゐるな空間だった。でかいパイナップルの浮き輪やら、日光を遮る機能を失つてゐるサンングラスやらが売られている。

ナイトプールでも行つてインスタグラムでもするためのアイテムなんだろうか。三浦と由比ヶ浜達もそんなんしたりすんのかなー、似合いそうだけどもなんかやだなあ。

「ほらほら、おにーさん、こういうのどうですか？」

なにこの面積が異常にない代物……つてスリングショットじゃねーか。中学一年生がこんなの着たら大変なことになるぞ。

「試着しちゃおっかな〜」

「いやヤメて？ 絶対俺が白い目で見られるから」

「いつも白い目で見られてるんだから、いーじゃないですか？」

「ちよつと？ なんで知ってるの？」

雪ノ下みたいなこと言うのやめてよね。同じセリフでも目が全然違うけど。

「じゃあじゃあ、こつちとこつち。どつちが似合うと思います？」

両手にハンガーをゆらゆらさせて微笑むめぐみ。

赤いビキニと水色のフリルの付いたワンピースか。軽く想像してみる。

「どっちも似合うだろ」

「えっ」

「ああ、選べなくてすまん」

「いやっ、その全然」

わちゃわちゃと顔の前で手を振るめぐみ。こいつすぐ顔赤くなるな。

「せっかくだから試着してみようかな」

「あ、ああ」

とは言ったもののどうしよう。

試着室に張り付いているのも変態だと思われそうだし、その辺の女子の水着を見てても変態だと思われそう。変態王子だと思われたら笑わない猫と会えるかしらん。

「おにーさんは、ここに立っててください。着替えたら開けますから」

指示されたので居場所の理由が出来た。命令じゃ仕方がないからな。

「覗いちゃ駄目ですよ〜?」

ここで覗こうとしてたら即通報だろ。

そもそも地面に這うようにするか、台に登るかしないと覗くことは出来ない。小町のお願いだとしてもそんなことはしない。一生のお願いだっただらするけど。

カーテンの奥から服を脱ぐ様子が音で伝わってくる。

「今、下着姿ですよっ」

「そりゃ脱いだらそうなるだろうな」

「んふふ、照れちゃって〜」

別に照れていない。むしろ会話していると、ここに立っていることを不審に思われなくて助かる。

「ブラジャーを脱いでますよ〜」

「そうか」

「ぱんつに手をかけましたよ〜」

「そうか」

「んふふ、一生懸命無関心を装うおにーさん、かつわい〜」

一生懸命ドキドキさせようとアピールしてくるめぐみん可愛いな。

めぐみんとか言うのと爆裂魔法使いそうだな。めぐみんはからかい上手な声してそうだけど、めぐみは下手くそだ。

こういうのは黙ってて服が脱げる音だけ聞こえる方がエロい。

「すっぱんぽんですよ〜?」

「そうかよ」

そう返事した途端、しゃーつとカーテンが開いた!

「じゃーん！」

試着室で誇らしげにしているめぐみは、赤いビキニを着ていた。

「びっくりしたでしょ〜？」

「あ、ああ、さすがに今のはドキツとしたぜ」

「んっふふ〜、おにーさんのえっち♡」

いや、えっちとかいう問題じゃねえよ。

そんな場面を他の人に見られたらと思っただらヒヤヒヤだつっの……。

「で、どうですか？」

「あ、ああ」

赤いビキニを着ためぐみは少し大人びて見える。中学一年生にしてはなかなかのスタイルだ。こんなのが同級生にいたら男はみんな惚れてしまうだろうな……。

「いいんじゃないの？ 似合ってる、可愛いと思うぞ」

「あ、ありがとうございます……」

可愛いなんて言われ慣れてるだろうに、恥ずかしそうにうつむいた。

「じゃっ、じゃあもう一つの方も着るからいい子で待つててくださいねっ」

閉じられたカーテンを見ながらいい子で待つ、どうも俺です。

おっぱいの大きな小学生の話だっけ。あれはよいこか。

お兄ちゃんスキルが発動するから中一に待つてろ言われて素直に待つてしまおう。なぜか外せないアビリティなんだよなあ。

再び、しゃーつとカーテンが開く。

「じゃじゃーん、こっちはど」

「やっぱり似合ってるし可愛いな」

「あ、あう」

「悪いな、お前が喋ってる途中で声出しちゃって」

「い、いえ、いいです、ケド」

水色のワンピースを着ためぐみはもじもじと体をくねらせた。

こちらのほうが年相応という感じがする。

「で、ど、どっちがその似合ってますか?」

「あ? ああ……どっちも似合ってるよ。自分の好きな方でいいんじゃないか?」

大体こういうときは俺が選んだ方がじゃない方を買うことが多い。小町とか。

無駄に傷つくから聞いて欲しくない。

よつてこの答えがベストだ。似合ってるのは本当だしな。

「それじゃー意味ないじゃないですか、あたしはおにーさんが選んだ水着が着たいんですよ」

そう言つて、腰に右手を当てて、左手の指をふりふりするめぐみ。

うわ、これ本音なんだろうな……さつき男性の意見も聞きたいなーって思っただけだつて言つてたのも忘れちゃつてるんだろうな。

いかん、さすがにこれはちよつと来るものがある。これが俺の欲しかった本物なの？
ついに本物を手にしてしまつたの？

いつものキャラ作りのような芝居がかった態度より、こういう素直なセリフの方が断然魅力的だ。

気恥ずかしいのを誤魔化すように、頬を掻きながら一つの水着をチョイスする。

「じゃあ、このセーラータイプのやつはどうだ？ 小町が着てたのに似てるんだが世界一可愛かつたぞ」

「うわー、おにーさん、さすがに引きます。それ以外にしてください」

初めてめぐみからジト目で睨まれてしまった。

似合うと思うんだがなあ……。

「全く、なーんでみんな妹のコトばかり好きなんだか」

めぐみは腕を組んで鼻を鳴らした。

そうだよな。間柴了とか妹好きすぎて怖いもんね。

俺も小町を守るためにフリツカージャブの練習しようかな。

でも、川なんとかさんに一発KOされるイメージしか沸かない。やめよう。

そんな想像をしつつも、水着を物色。

「これなんかどうだ？ お前の元気そうなイメージのオレンジでスタイルの良さもわかるビキニタイプ。パレオも付いて俺の中ではポニーテールと相性抜群」

俺の熱弁を聞いてほあつと口を開けるめぐみ。

また引かれてしまったのかもしれん。

「好みが聞ければ良かったのに、あたしのこと考えて選んでくれたんですね〜！ しかもスタイルが良いとか、んも〜えっちなんだからっ♡」

めぐみはぱあつと満面の笑みを浮かべると、両足をびよんびよんと跳ねさせて喜んだ。

ここまで素直に喜ばれると照れるんですけど。

この水着の試着のときだけは、一生懸命無関心を装うような努力をした。

パンケーキ

「よし！ 帰るか！」

「なんで帰るときが一番嬉しそうなんですかつ」

神野めぐみは大変不満そうにぶくつと頬を膨らませた。

だつて原宿なんて存在しているだけでダメージを受けるし。歩くたびにズガツズガツつて音が聞こえてくるしステータスウインドウが黄色いし。あらやだ、もうすぐ死んじゃう。キメラのつばさは原宿に売ってませんか？ 結構インスタ映えすると思うよ？ 知らんけど。

「シヨッピングの後はカフェで休憩つて決まってるじゃないですかー？」

なにそれ？ なんで決まってるの？ ギャルの鉄則？ 寿蘭がそう言ったの？

スーパーGALSが言つたんじゃあしょうがない。従うか……。

諦めて周りを見渡す。

なんで行列作つてんだかわからない店ばかりが目につく。実は薄い本も売ってるんでしょか。そうじゃないと意味がわからない。ラーメンならまだわかるが、ポップコーンつて……。しかもラーメンより高い。イミワカンナイ！

転生した異世界の方がよっぽど理解できるよなあ……と思いながら、この街の中に目線を泳がせているとうつつけの看板を見つけた。

「店はある所でいいか？」

「いやアレ、カフェはカフェでもネットカフェですよっ？」

「漫画も読めていいぞ」

「読みませんよっ!?」　なんで目の前に美少女がいるのに漫画なんて読もうとするんですかっ。そもそも今日は、パンケーキ食べるって決めてるんですから♡」

パンケーキ？　なにそれパンさんのケーキ？　つい目を輝かせる雪ノ下を想像してしまった。空想上の雪ノ下は可愛いんだよなあ、実物は冷たい。

まあ甘い物は嫌いじゃないから、とりあえず良しとする。

めぐみは腕を抱きついてくると、マーチのように絡ませていない方の腕を振り上げつつ行進を始めた。俺の心境はガンパレードマーチですけどね……。周囲の奴らが幻獣に見えるもんな。

数分ほどめぐみに引つ張られると目的地に着いたようだった。腕を組まれて歩くのもすつかり慣れてしまったな……。

「おいおい大行列じゃねえか」

パンケーキとやらも行列が出来てた。並ぶの好きだなこいつら……。若い女子のグ

ループかカップルしかない。

「じゃあ諦めるか」

「並びますよっ♪」

「諦めようぜ」

「並びますよっ♪」

駄目だ、この選択肢は選んでも永遠にループするタイプのやつだ。

俺が抵抗を諦めた。つくづく諦めるのが得意だな俺。

並んでいる前のカップルは、何が面白いのかユーチューバーのことだかなんだかで盛り上がっている。

こういうとき普通は雑談をするのだなあ……。

俺とめぐみでは会話の共通点などないだろう。

あらゆる人と友達になるめぐみと、あらゆる人と友達にならない俺。なにこれ矛盾？俺とめぐみが友だちになるうとしたら宇宙が崩壊しちゃうかもしれない……。

こんなことを考えながら黙って時間を潰すのは問題ないが、こいつが退屈するだろうな。

ふう、と一息つきながら、ようやく開放された腕を動かして両手をズボンのポケットに突っ込む。

少し曇ってきた空を見上げて、無理やり天気の話でも探しているとめぐみが声をかけてきた。

「おにーさんつてー、ラノベ読みます?」

……は?

ラノベ? ラノベと言ったか。こいつが?

どつからどう見ても読みそうにない。どう見てもラブベリーくらいしか読まなさそう。花とゆめですら読まないように見える。

ははーん、わかったぞ。俺の知っているラノベじゃないんだ。一体なんのことなのか……。

ライトニングノベルテイ? もれなく光るペンが貰えるよ、とか。なーんか違う気がしますね……。

熟考に入った俺を見て首をひねるめぐみ。

「知らないんですか? ライトノベルですよライトノベル。キモオタが読むやつですよ〜」

どうやら俺の知っているラノベだった。そして認識もあっていた。

「ちよつと? 俺のことはキモオタでいいからラノベ好きのことをキモオタって言わないでくださいいね?」

俺があっちゃんばりの演説をするとめぐみは手を合わせて謝る素振りを見せた。こりや2代目前田敦子を襲名するのは俺かもわからんね。13代目まで継承する望みが出てきたよ!!

「ごめんなさーい、キモオタ小説って言っちゃいけないでした。でも、読んでますヨネ?」

まあね、言うのはヤメたほうが良いけど、思うのは自由だからね。

思想の自由は大事だからね。俺って寛大。

「ああ、読んでるよラノベ」

「やっぱり! そうじゃないかと思ってました!」

それって俺をキモオタだと思つたつて言つてるようなもんですよね……。いや否定はしませんが。

「実は、あたし最近ラノベにハマつてて」

ええ? 嘘だろ? いや、嘘だ。

「アレだろ、お前。漫画大好きつて言つときながらワンピースくらいしか読まないみたいな感じだろ」

「えっ、なんでわかつたんですか!」

大きな目を見開いて驚くめぐみ。ほーらね。

ラノベだってどうせハルヒとSAOくらいしか読んでないんだろ。あれ？ それって十分じゃね？ バスでSAO読んでる女子中学生を見かけたらちよつと好きになっちゃうまである。

それにしても俺とこれだけ会話が續くって凄いやないか。友達が多いやつのコミュ力半端ねえな。

「漫画はそんなに読まないんですけどー。友達のおにーさんがラノベ作家なんですよ。その影響で読み始めたんですけどー」

ほーん。俺もいるよ、知り合いに書かないラノベ作家。あいつを作家と呼んでいいかはともかく似たようなもんだろ。つか、あれは間違いなくキモオタだ。面と向かってキモオタだって言っちゃっていいですよ。

「和泉マサムネ先生って言うんですけどねー」

「えっ!? 転生の銀狼の!?!」

思わずめぐみの肩を掴む。

ブラウンの瞳を丸くしながらココココと首を縦に降るめぐみ。

うっそ、マジかよ。え、マジ?!

「あれは微妙ですけどネッ」

「え、あ、そう? 俺は嫌いじゃないけどね。特に絵が」

好きなものを微妙と言われてしまったときに引き下がってしまう俺。

本当はかなり好きなんだよなあ……。

「じゃあお前は」

「あたしはマリア様がみてるとか好きですよっ」

「ほう。何薔薇派？」

ジョジョが好きと聞けば、何部が好きかと問う。

ドラクエが好きと聞けば、好きなナンバリングを聞く。

マリみてなら、当然、どの姉妹派を聞くのが筋というものだろう。ぼっちだから知らんけど。

「どれも捨てがたいんですけどく、黄薔薇ですかねく」

「ほー……俺は白だな。志摩子さん」

「へー、意外ですね！ でも、そっから、志摩子さんみたいのが好きなんです……」

やつべー、超楽しい。ぼっちだからこんな会話したことない。

きりりん氏が黒猫に出会ったときの気持ちでいると、めぐみはわかりやすくテンションを下げていた。

楽しすぎて地雷でも踏んじやったのかしらん。”不運”と”踊”^{ダンス}つちやったの？

心配そうな顔に気づいたのか、めぐみはいつものようににこぱーと笑いながら腕を

引っ張る。

「あ、もう入れるみたいですよ〜?」

レンガで出来た家みたいなどころに木のテーブルや椅子が並んだカフェ。店員達も黒いエプロンに白いブラウスと正統派のカフェといった風情だ。うん、間違いなくアウェイ。

とはいえ、めぐみばかりを凝視するわけにもいかず周りの奴らを見渡すとどいつもこいつもなぜかホットケーキばかり食っている。

「おい、めぐみ。みんなホットケーキ食ってるぞ」

「あはは、パンケーキですよ。あれがパンケーキですよっ」

え? いやあれはホットケーキだよ。だってさくらちゃんか食べてはにゃんってなってる。ケロちゃんも食ってたし。

「んふふ、これが今JCに流行ってるんですよ!」

ほーん。こんなもんがインスタ映えすんの? じゃあ、さくらちゃんがホットケーキ食ってるところもインスタ映えするの? そんなのするに決まってる。Instagramどころか知世ちゃんがYoutubeにアップしてるまでである。パンケーキ、ちい覚えた。

「おにーさんは何にしますー?」

「お前が好きなの選んでいいよ」

自然に相手に選択を委ねるとめぐみは遠慮することなく「ありがとーございます」とお礼を言った。

こういうとき自動で発動するお兄ちゃんスキルはある意味便利だ。

注文を終え、とらドラ！ の話をしているとウエイトレスが注文したものを持ってきた。

恋ヶ窪先生が結婚出来ないくらいだから平塚先生が出来ないのはやむを得ないんだよなあ……。早く貰ってあげて！ 恋ヶ窪先生なら、とらドラ・ポータブル！で俺が幸せにするから！

独身先生に思いを馳せつつウエイトレスがパンケーキとカトラリーを並べ終わるのを見守る。

で、写真を撮るわけだな。

「まずパンケーキだけ撮りますね〜」

「おう」

「その後、あたし達も一緒のところ撮りますよっ」

「あいよ」

わかってたとはばかりの返事をする、めぐみは少し不思議そうに、少し疑うようにこ

ちらを睨む。

「おにーさん、意外に把握してますネエ？ まさかとは思いますが……ないと思うんですが……ありえないとは思いますが、まさかこういうデートしたことあるんですか？」

「そこまで可能性ないの？ いや、ないけど。ところが実はあるんだよなあ。どっちだよ。まあ、一色とのデートの練習の経験があるわけだ。」

「部活で、ちよつとな」

嘘はついていない。あれは葉山隼人とデートをしたときの予行練習を一色に頼まれたから奉仕部としてしぶしぶ休日出勤しただけだ。やだ俺ってほんと社畜。

「へー。部活。へー」

「ジトリとした目で俺を疑うめぐみ。そんな部活があるかとも言いたげだね。俺も無いと思います。」

「お待たせしました」

ウエイトレスがドリンクを持ってきたようだ。助かった。

「いや、助かってない。何だこれは。」

「ちよつと？ これは一体？」

「これがアイステイーのダブルです」

むふんと胸を張るめぐみ。注文のときダブルって言うから二つ来るのかと思つたら、二倍量のことだったらしい。

それはいいが、これ……。

一本のストローが途中で別れているだけ。

いわゆるカップル用ってやつなのか……。

周りを見回すがそんなの頼んでるやつはいない。

「よし、先に飲んでいいぞ」

「ムフ♡」

俺がレディーファーストという紳士の行動を取ったにもかかわらず、あだち充キャラのような笑い方をするめぐみ。そう言えば新田の妹にちよつと似てるかもしれない。

「おにーさん、ひよつとして照れてるんですか、かつわいい」

「いや普通に恥ずかしいだろコレ」

もはや恥ずかしかしがることを恥ずかしいと思わないくらい恥ずかしいよ。

お前とだから恥ずかしいんじゃないやなくて、相手が誰でも恥ずかしいんだよ。だから照れてるっていうのとちよつと違うんだよなあ……。

「おにーさん、どうぞ」

満面の笑みでストローに向かって手のひらをすずいと出す。薦められれば薦められ

るほど手を出さない、どうも俺です。気をつけないと絶対ツボとか買っちゃうからね。「ドゾドゾ」

嬉しそうな顔を隠すこと無く、ひたすら手のひらを何度も俺に差し向けるめぐみ。ブツチャーなの？ 正直、地獄突きの方がマシなんだよなあ……。

ふー。目をつむって天井を仰ぐ。

ゆっくりと回るプロペラのようなものがいっぱいあった。これも意味わかんないんだよなあ。

絶対俺が飲もうとした途端に顔を近づけるってわかってるんだが、めぐみが諦める可能性はない。結局俺に選択肢などない。

ゆっくりとじわじわとストローに顔を近づけると、めぐみがシンクロするように近づ

く。

それを見てじわじわと顔を離すと、めぐみも距離をとった。

シンクロ率高すぎだろ。瞬間、心重なっちゃうよ？ 俺のATフィールドは全開なんですよ？

ところがスパロボ並みにあっさり突き破られるんだよなあ……。

暫く顔を近づけあったり、離しあったりしていると、周囲からクスクスと笑い声が聞こえた。

「ねえみてあれ」

「わー、かつわいー」

「付き合いたてかな、いいなー若いつていいなー」

「男の子の方、顔真つ赤じゃん」

そんな会話がほしよほしよと聞こえる。はい、恥ずかしさで人は死にますか？ 答え

はYESだね！

こんなことをしているくらいなら、さっさと済ませたほうがいい。

嘆息した俺はストローに口をつけようとすると、めぐみが突然手をあげた。

「あ、ウエイトレスさーん、撮ってもらっていいですか」

なっ……。

これは想定外だった。

もともと周囲から指を刺されていたが、完全に注目の的。

「彼氏さん、こっち向いていただけますか？」

む、無理です。

綺麗なウエイトレスさんにそう言っていたくのは大変光栄なのですが。

「あ、この状態で大丈夫ですー♡ このチョー恥ずかしがりまくつてるところの写真が

欲しいんで」

恥ずかしがってないよなんて言えないよ絶対。

おそらくにこばーと笑っているだろう彼女の顔を見ることもできず、首のあたりを見るのがせいぜい。細くて白いうなじは健康的で色っぽいには程遠い。だからこの胸の高鳴りはあくまで恥をかくことへのもので、彼女の魅力とは関係がない。ないと思う。ないということにしてくれ。

結局途中がハートの形になったストローの両端を、横ピースサインで嬉しそうに笑うポニーテールの美少女と、必死でなんでもないようにしようとして死んだ魚の眼をキョドらせる男の写真が撮られた。

心理テスト

「お兄ちゃん、いや間違えた、ごみいちゃん」

「ちよつと、逆じゃない？ 合つてたよ？ なんでわざわざ言い直したの？」

「なんで自分の部屋に引きこもってるの？ そんなにヒツキーってあだ名が気に入ってるの？」

「ちげえよ……あいつがいるからだろ」

俺の妹、いや世界の妹である比企谷小町は大仰に、ふうふうとため息を付いて疑問を唱える。

「なんでお友達が遊びに来ているのに自分の部屋に引きこもるの」
「いつの間に友達になつたんだよ……」。

「おいおい、めぐみは小町ちゃんのお友達でしょう？ 仲良くあそびあそばせ」
「やんわりと良いところのお母さんのようにたしなめる俺。」

「せつせつせーので、大好っきー♡したら良いよ？ 尊いよ？」

「ほんとごみいちゃんだなあ……わかるでしょ、全く」

ゲロ以下の匂いがプンプンするぜえつとでも言わんばかりの目で俺を見る小町。

やだわ……なんでこんな子になっちゃったのかしら。私が悪いのかしら。間違いないわ。だって小町ちゃんも天使ですもの。

「じゃあ、遊ぶけど。ちよつと2人じゃ出来ない遊びだからリビング来て」

ちよいちよいと手招きされてしまう。

そう言われたら断るわけにもいかない。

3人以上で遊ぶなんて何をするのかしら……ぼつちだからわからんぞ。桃鉄は1人でやるものだし、いたストも1人でやるものだし、スマブラも1人だろ。うーん、想像もつかない……。

リビングに入ると、制服姿で紅茶を片手にクッキーをはむはむ食べているJCがいた。もちろんポニーテールの快活な美少女、神野めぐみだ。こうして見る分には年相応にあどけないんだけどなあ……。

「あ、おにーさん、お邪魔してまーす♡」

本当にお邪魔なんだよなあ……。おジャ魔女の方がよっほど邪魔じゃない。むしろ居てくれたらと願うまである。もしかしたら本当に居てくれちゃうかもしれないよ？

めぐみの対面にあるソファにどっかりと腰を下ろすと、めぐみはとてつと当たり前のように隣に座る。

いままでめぐみが座っていた場所に小町が座って、じとつとした目を俺に向けた。な

んで俺に？

「はあ……もうからかわれてるのは小町なんじゃないかと思ってるよ」

そう言つて、がくつと肩を落としながら嘆息する。

俺は何もしてないぞ。

「じゃ、この本に書いてある心理テストをしますからね」

ものすごいテンションの低さで仕方なさげに本をふりふり、宣言する小町。

それに対するように、めぐみはアゲアゲで腕を振り上げた。

「へ〜…心理テストデスカ〜!! 面白そうですね〜? ね、おにーさん?」

「お、おう」

これなんなの？

土砂降りの雨の日に仕方なく散歩に出かける主人と、その犬みたいな感じですけど？

俺は一体、どんな気持ちで居たらいいのか。

「じゃ、第一問。あなたは丘の上に大きな家を買って住んでいます。そこで飼っているペットの数を答えてください」

ほーん。

これが3人でないと出来ない遊び？

ま、1対1だと面白くないのかな。知らんけど。

適当に答えるか。

「9匹」

「きゅっ……!?!」

なぜか飛び上がるようにソファを立つめぐみ。

どしたのワサワサ。

小町は冷静にMCを続けるべく、指をビツと指した。

「めぐみちゃんも早く答える」

「あ、あゝ。あたしも、9匹なんだゝ」

両手の指を合わせて、天井を見ながらそう答えるめぐみは明らかにオカシイ。なぜ耳まで顔が赤いのか。

「あ、そう。偶然だね。答えは、将来欲しいと思ってる子供の数でした」

MC小町は非常に淡々と進行していた。これじゃ盛り上がらないぞ、と思いきや隣のJCは超盛り上がっていた。

「お、おにーさん、野球チームでも作るつもりですかっ。んもゝ、大変ですよ、そんなに作るの」

「あ? ああ、まあ、そうね」

正直、心理テストなどそれほど真剣に答えていない。

そもそも信憑性もない。

真に受けていないので、本当に9人作るつもりもない。よってこのような返事しかできない。

だが、そんなにいたら専業主夫が大変だし、ほとんど妊娠してるから夫婦ともに忙しいのに収入がない。日本政府は少子化対策をする気がないな。まずは俺を支援するべき。

「ま、大変だよな」

「あ、あ、相手だって、そんなに付き合ってくれますかね〜？」

ふむ。大家族スペシヤルになっちゃう人数だし、産むのはさぞ大変だろう。

「難しいだろうな」

「あ、あたしは、結構好きだから、ヘーキですよ？」

ほーん。こいつ子供好きなのか。ま、友達がいっぱいいるんだからそりやそうかもな。こいつ自体、まだ子供みたいなもんだし。

こいつの子供ならまあ、可愛いのだろう。

「じゃ、できたら見せてくれ」

「ええっ!? 見せるんですか!？」

「おう、楽しみにしてる」

「え？ あ？ え？ でもその、相手がその見せてもいいって言うかどうか」

めぐみは、しどろもどろでぼしょぼしょとそう言った。

ああ、今はそういうのも厳しいよな。

「まー、うかつにネットに上げるのはどうかと思うがな。知り合いならいいんじゃないやねえの。親戚とか」

「し、親戚に見せるんですかつ!? こっつ、子作りを!」

めぐみは顔を真っ赤にして頬に両手を当てていた。

どうやら、俺が子供と思っていたものを子作りと勘違いしていたようだな。ええ……。マジで……。

結構好きだからへーきですよ、とか嘘に決まっている。

それに9人子供がいるならそれなりの子作りが必要だろうけど、子作りを見せてくれとか親戚に見せるという発想はない。えっちーずじゃないんだから。

なんと言ったものかと、冷静に思案していると、露骨に不機嫌なため息が聞こえる。

「はあく。小町、もういいかな? もう何を見せられているんだとかしか言えないんだけど」

心底うんざりした顔で俺たちを見る小町。何? 俺が悪いの? なんかごめんね? 仕方ない。

俺はめぐみに向き合うとしつかりと目を見て言った。

「あのな、俺はお前の子作りを見せてくれって言ったわけじゃないんだ」

「そ、それって……見るんじゃないかって……あばばば」

めぐみはなぜか、かおす先生みたいになってしまった。

なんで俺がセクハラしてるみたいになってんだよ……別に興味ないからね？ 俺は

ロリコンじゃないからね？

「で、でも、ちよつと嬉しい、かもです。んふふ」

めぐみはそう言って、真っ赤になった頬を隠すように手をあてたまま、くりくりとした目を輝かせて俺を見上げる。長いまつげや艶やかで桃色の唇が、どうしようもなくそれが子供ではなく女の子だと俺に告げていた。

「そ、それって……ん」

中学一年生相手に、声が上がった。つばを飲む音も聞こえてしまったかもしれない。

「なーんて、冗談ですよ。本気にしちゃったんですか？」

俺の鼻をつんと指でつついた後、とてつとりビングの外に向うめぐみ。

後ろ手にノブを掴みながら、んべつと舌を出した後、おトイレ借りますねーと言いな
がらドアを閉めた。

狐につままれたような顔でぼーっとしていると、特大級のため息が聞こえる。

恐る恐るちらと妹の表情を伺うと、どんぶりいっぱい砂糖を嚙んだようにうえーつとしていた。

なんか……なんか、ごめんね？

はじめてのLINE

「お兄ちゃん、お願いがあるんだけど」

夏休みにエアコンの効いたリビングでカウチポテトをキメていると、麦茶を飲みに来たらしい小町から真剣な声で依頼された。とりあえず一時停止ボタンを押す。

じーわじーわと蝉の声が窓の外から聞こえる。アイス買ってきて、程度であればもつと気軽なお願いの仕方であり、多少身構える。

しかし世界の妹、比企谷小町のお願いとあれば聞く以外無いのだろう。
「なんだ」

とは言え、出来ないお願いをされたら困るので内容を確認する。もうニチアサ見るのやメてとか言われたら困るもんな。むしろ小町も見るべきでプルンス。

「いい加減、LINEやって」

「何故だ」

「今どきLINEやるのに理由がいると思う？」

「必要じゃないしな」

「必要」

どうも怪しい。

そこまで抵抗するようなことではないと思わなくもないのだが、どうも怪しいのだ。

「小町との連絡には必要じゃないよな？ 誰の差金だ？」

「そ、そういうんじゃないよ。小町のためにも必要なんじゃないかな？」

演技が下手！

明らかに誤魔化している。

「今ならスタンプもプレゼントしちゃうよ？ 孤独のグルメのやつ」

なんで孤独のグルメのスタンプなの？ そんなに俺にアームロックかけたいの？

それにしてもそこまでして俺にLINEさせたいなんて、ますます怪しい。

顎をこすりながら、冷蔵庫を開ける小町を横目で見やる。

麦茶を一気飲みした小町は、ぷはと息をつくとき、ニンマリと笑顔になる。

「い、い、か、ら、い、れ、て」

「お、おう」

まあそもそも俺に拒否権など無いのだ。わかっていたことだ。

ぼちぼちと速やかにインストールを行うと、小町がスマホをどーんと見せつけてく

る。何？ 印籠？ 水戸黄門？

「早くふるふるするよ」

「は？」

何を言ってるんだ？

「ともだちになる方法だよ、ふるふる」

は？

「僕は悪いスライムじゃないよ、ふるふる？」

「何それ。何言ってるのお兄ちゃん」

「いや、俺が言いたいんだけど……」

ここまで血を分けた兄妹の意思疎通が困難なことある？

困惑している俺のため息をつくとき、スマホが奪われた。

何やら端末同士を振っている。何してるのん……？

「はい、ともだちになったから」

LINEの画面を見ると、こまちという名前が追加されている。

え、今の行動で？

全く理解できないんですけど？

ともだちの追加方法はよくわからないが、ともかくLINEで小町と連絡できるようになったようだ。無料通話アプリということだが、目の前にいるので通話する選択肢は

発生しない。

チャットとしての機能の方がよく使われていることは知っている。

試しに何か送ってみようかと思っていると、こまちからスタンプが送られてきた。なんで横山光輝三国志の孔明……？

「ほらね、スタンプとか使えて楽しいでしょ」

「そうだな、でもなんでこの報告は孔明にとつてショックだったの……？」

一番最初のメッセージがコレっていうことが俺にとつてショックだったんだけど？

「細かいことはいいの！ このスタンプも欲しかったらあげるからさ」

LINE始めたばかりだからつてやたら優しいな。ラグナロクオンライン始めたばかりのアカライトみたいに手厚く甘やかしてくるじゃん。このままネカマになるまである。

「さー、後は連絡だ」

連絡とは……？

もらったスタンプをダウンロードするのに忙しく、あたふたしている間になにか不穏な動きをしているようだ。

よく画面を見てみると、ともだちがもう一人増えているようだった。

めぐみんと書かれている女の子は、神野めぐみだ。あたしつて可愛いでしょ？ と言

わんばかりに横ピースをした笑顔のアイコンだった。まあ本当に可愛いわけだが……。
こういう画面なのかー、などと確認していると早くも着信。小町ではなく、めぐみんからだ。

「小町、ひよつとして俺にLINEさせたいのってめぐみが関係ある？」

「あー、わかっちゃったかー」

ぺしつと額を手のひらで叩いた。それがポーズであり本当にバレないようにしているわけではないことはわかる。

「まー、ぶっちゃけですねー。めぐみちゃんが私を通じてお兄ちゃんに連絡したり、アポ取ろうとしたり、めんどくさくて……。小町、お兄ちゃんのマネージャーじゃないんで……。小町がアイドルになったらお兄ちゃんがマネージャーするならウエルカムだけど。今の小町の的にはちよつとポイント高い」

小町の本音がダダ漏れで怖い……。そして小町のシンデレラガールズルートは始まったら確実にPとして馬車馬のように働いてしまうことも怖い……。

軽く戦慄しつつ、通話を受ける。インターフェースは電話とあまり変わらないので流石に操作方法は理解できた。

電話と違うのはビデオ通話が基本なのな。

すぐにめぐみのにこやかな笑顔が表示される。俺の顔を認識すると手を振った。

「あつ、おにーさん？ 今どんなパンツ履いてるの？」

古っ!?

おっさんジョークじゃん。うちの父親が友人との電話でたまにやって小町から冷たい目で見られるやつだ。

しかし一周回って新しいのか、それともめぐみがやれば新しいのか。

神野めぐみなら許されるのだろう。こいつはこういうやつだ。

そして、俺の人生初のビデオ通話がこの会話というわけだ。うん、やはり俺の青春はなにかと間違っている。

しかし俺は優しいお兄さんなので、この残念な会話の始まりでも無下にはしない。

「プリキュアに決まってるんだろ」

「えーっ!?! 大人向けのサイズ売ってるんですかーっ!?! 履けるのは幼稚園児までだと

思っていました」

めぐみは開いた手を口元にあてつつ、目を丸くした。

俺がプリキュアのパンツを履いているとあっさり信じてしまったようだ。

こいつがアホなのか、俺がプリキュア好きすぎるのがバレているのか。多分両方だな！

「本当は覚えてねえよ。小町のならともかく自分のパンツなんか興味ねえ」

「へ〜。妹のパンツには興味あるんですね〜」

意外とめぐみは驚いていない。引いてもいない。おかしいな、ウイットに飛んだジョークのはずなんだが。小町の方を見やるとドン引きしていた。そうだよな、そのリアクションが正しいぞ。ジョークだよ!?

「じゃあじゃあ、あたしのパンツには興味ありますかっ?」

うーん……これって悪魔の質問じゃね? なんて答えても駄目じゃね?

あると答えた場合、「おにーさんってえっちですな〜」とからかわれる。

ないと答えた場合、「おにーさんってウブなんですな〜」からかわれる。

これは西片くんだったら顔を真っ赤にして悶絶しちゃうだろうなあ……。

でも、俺は別に中学一年生のニセビッチにからかわれたところでどうということはない。

「興味あるって言ったら、見せてくれるのか?」

「ひあつ!! 見せつ!! お、教えてあげるだけですよっ」

ちよろいなあ……。

からかうつもりで自爆するパターンが板についちちゃってるんだよなあ……。

「ほーん。で?」

「で? とは?」

「どんなパンツ履いてるの?」

「んもく、やあつぱり知りたいたんじやないですか。んっふふく、なんと! 縞パンです

! 白とピンクの!」

「へー」

「えっ!? それだけですかつ!」

「だって、嘘かもしれないし。俺だって嘘だったじゃん」

思った展開と違うのだろう、困ったような素振りを見せる。うーん、ちよつといじめすぎたか?

と思いつつ、からかおうとしてきた相手をからかい返すつもり満々だった。やられたらやり返す。倍返しするの癖になってんだ、俺。新連載「HUNTER X BANK ER」にご期待下さい!

「その場でスカートをめくればいいだけだぞ?」

「なくんだ、カンタン♪ ってちよつと!」

「お前、ノリツッコミうまいのな」

「そんなんで褒められたくなかったですよっ!」

スマホ越しでもわかるほど顔を真っ赤にしていた。こっちは普通のテンションなので、多少申し訳なくなってくる。いつの間にか小町は居なくなっていた。

「あー、あれだ。スカートの中を写真撮って、データで送れば十分だぞ」

「あく、それならそこまで恥ずかしくないかもですねっ♡」

「どうやら感覚が麻痺してきちゃったようだな。ここまでちよろいと心配だな……」

「じゃあ、一旦通話を切って写真撮りますねっ」

「おう、静止画だとスマホの待ち受けにもできて便利だからな」

「ええっ!? 恥ずかしくすぎますよっ!?」

「そうだよ、えっちな写真なんか人にあげちゃ駄目なの。この機会に学べっつーの。」

「データで他人に写真を渡すのはリスクだぞ。友達だと思ってもどこから流出するかわからない。そういう写真を撮ったりすること自体やめておけ」

柄にもなく説教してしまった。

お兄ちゃんスキルの発動もいいことばかりじゃねえなあ。

でもこいつ友達多いらしいし、心配なんだよな……。俺が変質者だったら大変なことになってるぞ。材木座みたいになんか。

「でも、おにーさんがあたしの画像を待ち受けにしてくれるのは嬉しいですねっ♪」

にこばーつと嬉しそうに笑うめぐみ。

「おいおい、パンツの写真を待ち受けにされて嬉しいとか馬鹿かよ……こういうところが心配すぎるんだ。心配すぎて、むずむずと心臓のあたりが痒くなる。それを誤魔化す

ようにぼりぼりと後頭部を搔いた。

「そもそも、何の用なんだ？　なんか用事があったんじゃねーの」

この話はもう続けなくていいだろう。多少強引だが話題を変える。

「あ、そうそう！　えっと、もうすぐおにーさんってお誕生日じゃないですか。それで、プレゼントどうしようかな〜っていっぱい考えたんですけど、好みとか全然よくわからないし、小町ちゃんに聞いたら本人に自分で聞けばってなって。でも、本人から聞いたものをそのまま渡すなんてつまらないから、一緒に選びに行きたいんですよ♡」

ぷちっ

とりあえず赤いボタンを押して通話を切った。

ふっっ。

思わず顔を抑えた。熱を持つてることが自分でもわかる。

いきなり素に戻るの反則だろ。

すぐに着信音が鳴る。まあ当然だよな。

「なんで切っちゃうんですか〜！　しかもなんで音声通話なんですか〜！」

こちらからはめぐみはぶんすか怒っているところが見えるが、俺の表情は向こうには映らないようだ。便利だな、LINE。

「すまん、今お風呂上がりで裸なんだ」

「一瞬でお風呂に!？」

ノリツツコミをさせることでなんとか誤魔化せたようだ。

つたく、まともに誕生日を祝われたことがないぼっちを舐めるなよ。完全に籠絡する
とこだっただろうが……。

ビジュアルを伴わない深呼吸は、どうやらため息と間違えてくれたようだった。

デート直前

——参った。

さすがにこれをデートじゃないと言い切れるほど俺は馬鹿じゃない。

ただ男女で出かけるだけではデートとは言わない。

そりやそうだ、小町とスーパーにコロッケ買いに行っただけでデートだったら俺はしよっちゆうデートしまくってることになる。

精霊をデレさせるためにすることもデートではあるが、妹の監視下で選択肢を指示されるデートは一般的ではない。デート・ア・ライブの世界は特殊なのだろう、ラノベ脳ではない一般的には。俺は一般人だ。材木座とは違うのだよ、材木座とは！

デートという言葉を書き辞書で引くと、デートは英語のDATEから来ている。つまり日時を指定して待ち合わせてどこかに行くことがデートと呼ばれるそうである。

一色とのあれはデート、とは言えない。確かに日時は強制的に指定されたし、場所も指定されて待ち合わせた。しかし、あれは依頼だ。葉山隼人という男と付き合うことになったときの予行練習であり、あれをデートしたと言ってしまったっては一色に悪い。

由比ヶ浜と買い物したこともあるが、あれは同じ部活の仲間として同じ部活の仲間

ある雪ノ下雪乃へのプレゼントを買いに行ったただけだ。最初は小町も居たわけで、待ち合わせた時点では3人居たとなるとこれもデートとは言えないだろう。

さて、今回のコレはなんだろう。

俺への誕生日プレゼントを選ぶために一緒に買物に行く。

場所と時間をLINEでやり取りして決めた。

相手は兄妹でも部活の仲間でもない異性。

普通はこれをデートと呼びそうな気がする。

いやいやいや、しかし、待てよ。

相手がもし5歳児だとしたらどうだろう、それはデートとは言えないんじゃないだろうか。

何故か。

それは異性として捉えていないから、恋愛感情に発展しようがないから。

つまり俺が彼女をどう思っているかによってデートかそうでないかが決まるということだ。

そうなる那么这个問題は余計に難しくなってしまう。

それはすなわち、中学一年生の美少女である神野めぐみを俺はどう思っているのか、ということだ。

しかも。

しかもだ、彼女がわざわざ俺にいちいち纏わりついてきたり、なんやかんやで会おうとしてきたり、からかおうとしてるけど要するに誘っちゃってる感じ。

こんなのかぐや様は告らせたいだったら、告白している扱いになる行動だ。つ、つまり。

あいつ、俺のこと、す、す、好きなんじや……

ああああああああ!!!

俺はリビングのラグの上でのたうち回った。

恥ずかしいiiiiiiiiiiiiiiii!

っていうか、普通の恋愛経験がない高校生男子だったら親戚でもない女の子が誕生日プレゼントくれるだけでももう十分惚れちゃうだろ。

それが全然欲しくないものだとしても惚れるだろ。

なのに、散々考えたけど、欲しいものがわからなかつたから一緒に買いに行きたいとか言いやがって……。

ああああああああ!!!

思いつきだけで恥ずかしすぎるううう!

尺取り虫のような動きをしたり、柔道の受け身みたいな動きをしたりしていると、何

やら視線を感じる。

ちらとそちらに目をやると、スマホを持った小町がいた。

「あ、見つかつちやつた」

「何をしている……」

非常に嫌な予感がする。

小町の持っているスマホは赤いランプが点滅しているように見えるところが特に。

「デート前に照れまくって悶もたえているところをデート相手に動画でお伝えしてあげてる」

「めぐみに!? 今の状況を!? なんてことをするんだ!」

「お兄ちゃんがイケないんだよ? めぐみちゃんが心配して小町に連絡してきたから、

ありのままのお兄ちゃんを中継してたわけ」

鬼なの? キュウベえなの? なんで人間は照れてるところを相手に見られるのが

恥ずかしいんだい、訳がわからないよとか言い出しそうなんだけど? まどかみたいなの

声してるのに……。

愕然として見ていると、小町は更に追い打ちをかける。

「お兄ちゃん、スマホ確認しなよ」

ソファアーの上にうつちやつていたスマホを見ると、LINEにいくつかメッセージが

来ている。もちろん全てめぐみからだ。小町とめぐみ以外に連絡先無いしね?

今日、楽しみですね。

もう、準備できてますか。

忘れてないですよ？

おにーさん？

あれ？ まだ寝てるんですか？

ひよつとして体調が悪いとか・・・

なんか急用とかだったら全然あたしは大丈夫ですよ？

——この2時間くらいか。

ぼつちの俺にとつてスマホは暇な時にポチポチするものであつて、連絡が来ることなど滅多にない。

友達の多い彼女からするとこれだけ既読にならないことは不安だったのだろう。

申し訳無さで胸が一杯になるが……。

そんな感傷が出来ないのは、目の前に生暖かい目で見てくる妹がいるからだ。

「ほらね、めぐみちゃん。今の一連の行動は完全にデート直前の恥ずかしさで悶もたえてただけで、体調が悪いとかじゃないから」

「あ、ああ、そうですね♪ ほんと、もうおにーさんったら♡」

妹のスマホの奥では、余裕を持った女子ぶつてきやびるんした神野めぐみがぱちこー

んとウインクしていたが、そんな下手くそなからかいが通じるわけがない。

それどころじゃねーんだよ！ 単に年下の女の子とのデートの直前で心がわさわさしている俺のことを本気で心配してるとかマジでヤバイだろ！

申し訳無さとか、羞恥とか、照れ臭さとか、正直なところ可愛いな畜生！ そんな、ありとあらゆる意味で顔が赤すぎる！

そしてそんな彼女が安心した途端に今までどおりのキャラで接してくれることが有難いというか、こそばゆいというか、ほんわかと心が暖かくなるというか、最初から身悶えしている状態なのに追い打ちが強力すぎだ。

「こ、これから着替えるから出て行ってね？」

それだけ言うのが精一杯だったが、当然そのセリフの恥ずかしさは本人もわかっていておりで。

中学生の女の子達でもふんわりと優しく笑ってしまうほどに、俺は他愛もない男の子に過ぎなかった。

パースデープレゼント

もうすぐ駅に到着する。

来てしまったなあ、デ、デートに。

しかもどう考えても彼女は俺のことが、す、好きなのわけだが。

……いや、まだわからない。そう思わせる作戦であり、てつてれーという音とともにドツキリの看板を持って出てくる可能性がある。

友達が多すぎるめぐみのことだ、バラエティ番組のディレクターが友人でもおかしくない。

そう思いつつも、俺はもう相手を待たせているのは明確なので、電車のドアがあくやいなや走って待ち合わせ場所に向かった。

「待たせて悪かったな」

「ううん、今来たところですよ」

嘘だっ!!

なんていくら性格がひねくれている俺でも言わないが。今来たところじゃないことは知っている。

「そんなことより、そんなに急いで来るなんてえ。そんなに早くあたしに会いたかったんですかあ？」

いや、待たせて悪いからだよ。

しかし、悪いと思ってるなら、ここはイエスと答えるべきなんだろうなあ。

「まあな」

「んふふ、照れちゃって♡」

照れてないっての。

思わず、後頭部をぼりぼりと搔いた。

だいたい、彼女は妹よりも年下の中学一年生なわけで。なんで俺のほうが照れなきやいけないんだ。

「さ、行きますよっ」

そう言つて手を差し出してくるあたり、やはりお子様感がある。小町も昔はよくそうしてきたものだ。今でもたまーにする。

「おう」

手を出すと、一度普通に握つてから、すべての指を絡ませるように握り直した。随分とがっちり手を繋ぐのね。小さい手だから離れて迷子になっちゃうかもしれないからかしらん。

「おにーさん、これ何ていうか知ってます?」

「は? これって?」

「これですよ、こ、れ」

彼女は右手を高く上げて、俺の左手とがっちり握りあつた部分を見せてくる。

「ささくれ?」

「いえ、おにーさんの親不孝の話ではなく」

「ちよつと? それは迷信だからね?」

うにうにと俺の右手が握られる。こんな他愛もない会話が楽しくて仕方がないといった様子で。俺をからかいたいならそういうのは隠せ。純粹に可愛いだろ。

「で? 答えは何だったんだ?」

「ああ。えへ。この手の握り方なんですけど、恋人繋ぎって言うんですよ」

なっ——!?

道理で小町とはこんな握り方したことないはずだ。なに、世の中の恋人たちはこうしているわけ? リア充爆発しろ。何、俺? 俺のことはほつといてくれ。

「あはは、おにーさん、こんなこと言われたくらいで何もそこまで恥ずかしがらなくつてもいーのに」

恋人繋ぎってネーミングが恥ずかしいっての。大体恋人って言葉がもうヤバイ。お

口の恋人ロツテというキャッチコピーですら恥ずかしいまでである。ロツテのおもちや！ だったら恥ずかしくない。

「困っちゃいますね、どつからどう見ても恋人同士ですよ？」

何一つ、びた一文、困っていない口調だった。恋人繋ぎにした手をぶんぶんと振っているところが恋人っぽくないので残念ながら恋人同士には見えないと思われる。でも恥ずかしい。相手が川なんとかさんの妹のけーちゃんだったら微笑ましいだろうけどね！

「じゃあまずはスタバで休憩しましょうっ」

「えっ」

こいつらってなんですぐ休憩したがるの？ 薬草より宿屋の方が安いから？

そしてなんでスタバに行きたがるの？ 意識高い系なの？

なお、こういうときに反論なんてする権利はない。あと休憩っていうと普通なのに、ご休憩って書くときめくのはなぜですか？ ときめきの魔法なの？ 教えて、こんまり先生。

「マックスコーヒーフラペチーノのグランデーっで♪」

何っ!? 話が変わった！ なんとというコラボしてやがるんだスタバ！ そしてナイ スチョイスだめぐみん！

「じゃあ俺もそれで」

「いいいい、いらないうですつ」

わちやわちやと店員にキャンセルをかけるめぐみ。なにこれ、サンドウィッチマンのネタ？ 二つ来ちやうぜ、つて二人で二つ。別におかしくないぞ。

めぐみは俺の耳たぶを軽く引つ張つて耳打ちをしてくる。

「こういうところのスタバは人数分買わなくても大丈夫なんですよつ。大きいの一つの方がオトクですから」

ほーん。そういうものか。確かに高いよな。マッ缶五本くらい買えそうだ。

しっかし二人で一つしか買つてないのに、スタバはやたらニコニコしてるな。いやむしろ、まるでアツアツのカップルを見るようにニヤニヤしていると云つてもいいね。どこぞにバカカップルでもいるのかな。

めぐみは片手でスマホで電子決済したり、フラペチーノを受け取ったりと不器用そうにやっている。なんで両手を使わないんだと思つたら、俺とがっちり手を繋いだままだからだ。どうやらバカカップルは俺達だったようだな？ そりやみんな苦笑だよ。あたしや恥ずかしいよ……などと思うまるこであった。

俺がキートン山田のナレーションをしている間に、そのままテーブルに連れて行かれて、がっちりホールドされている手もテーブルの上に。なるほど腕相撲でも始めるの

か。それとも「いつせーのせ」ゲームでもするのか。この上げた指を当てるゲームは千葉市の中ではチョムチョムとかチョメチョメと呼ぶやつらもいる。山城新伍は関係ない。

「んふふ、手、外さないんですねっ」

ちよつと？ 俺が選択肢を選んだかのように言うのやめてくれる？ 繋がれた手を

振りほどけるほど勇気がないだけだよ？ 僕の魂ごと、離してしまう気がするから。

とはいえ、なんか理由があれば外せるか。

「手汗をかいてきたからもう離すか」

「気にしないから大丈夫ですよっ」

えっ、手汗はほんとかいてるの？ 方便だったんだけど？ マジで離してくれ

……。

めぐみは空いている方の手でフラペチーノを握ると、俺の口の方へストローを向けた。あー、先に俺に飲ませてくれるのか。後でストローを交換するんだな。

甘い！ 冷たい！ 美味しい！

さすがスタバだ、さすがマックスコーヒーだ。まるでパピコみたい。あれ？ じゃあパピコでよくね？

そんなこと言っちゃうとすべて台無しだということのはわかるので率直な感想を述べ

ておく。

「うまい」

「ど〜れどれ」

ぱくつ。

ずーずー。

「ぷはっ、おいしー」

俺は口をぽかんと開けていた。当然のごとくに俺が使っていたストローを使用して飲んだんだけど？　なんで？　ねえなんで？

ストローが二本刺さってるのを二人で使うよりは全然恥ずかしくないことはわかったけど。

開けたままの口を催促と捉えたのか、鳥の餌付けのようにストローが口に突っ込まれる。

ちゅーちゅー。

やはりうまい。

ずーずー。

ちゅーちゅー。

ずーずー。

ちゅーちゅー。

片手は繋いだままで、間接キスを繰り返していた。俺達、ほんとに爆発したほうが良いんじゃないの？ いや、これはあれだから。美味しいマックスコーヒーフラペチーノを極めてリーズナブルに平等に楽しんでいるだけだから。間接キスとか誰も気にしてないから。そんなこと言ったら意識しすぎてキモいって言われちゃう。ふー、自意識過剰ルートの回避成功。

こいつもあれだろ、女友達とかと普段こうやってるんだろう。だから平気ってわけだ。俺はぼっちだから慣れてないだけ。ホントだったら男友達とこうしててもおかしくない。戸塚とか。ええつ、何それ平常心では居られない！

「なんかもう、間接キスなんて慣れてきちゃいましたねっ？」

いやそこまで慣れてないし。でもこんな普通にストローを使い回すなんてことはイジリーに進化した俺に比べたら大したことないだろう。自分で撒いた種というやつか。

異常も、日々続くと、正常になる。

——戦場のメリークリスマスだったか。

ってそんな壮大なストーリーではない。ごく普通の千葉にあるスタバだ。ベビーカーを押している妊婦さんが休憩しているようなのかな風景だ。

「こうしてるとお、まるで新婚さんみたいですねっ？」

——は？

何を言ってるのかな？

こういうのを意識しないってのは彼氏彼女の間柄より手前の友人関係だと思ってたら関係が先に行つてたのかよ。

「俺はまだ慣れてないぞ」

「それつてえ、まだあたしのこと、女だと思つてくれてるつてことですかっ？」

「なにそれ？ 熟年夫婦の会話？」

関係性があまりにも急上昇しすぎだ。ジンバブエ・ドルも真つ青のインフレだろ。しかし、そんなことを言われながら、繋ぎあつた手を握られたり、潤んだ瞳で見つめられたりすると八幡困っちゃう。

ここは大人らしく振る舞う方がいいだろう。西方くんはどうしてああもカンタンに振り回されるのかつて？ 坊やだからさ。

ただし、長瀬さんにイジられた場合はうまくこなせる自信は全くない。

俺は妻を気取つた中学一年生に仰々しく肩をすくめてみせる。

「フツ、俺をからかつて楽しいか？」

「楽しいですよお、とつても」

「そりやよかつたな」

どうだ。この大人の対応。

さり気なく横を向いて視線を逃したのは、クールさを醸し出すためであつて、決して彼女の笑顔が眩しくて見ていたら恥ずかしくて仕方がないからではない。

「誕生日プレゼント、何がいいですかーあ?」

「あ、ああ。なんでもいい」

突然の質問を受けて、窓の外をぼんやりと見ながら生返事。そういやそれが目的だったな。

「ほーらねっ」

「何がほーらねっだ」

「永年連れ添つた夫婦みたいじゃないですか。今のやりとり」
かーっ。

俺はルパンがろくでもないことを言い出したときの次元大介のように顔を抑えた。
この女は峰不二子よりも厄介だ。少なくとも俺にとつては。

連れて行かれた店は、意外過ぎることにメガネ屋だった。

「めぐみ、俺は目が悪いわけじゃないんだ。目つきが悪いだけだ」

「知ってますよっ♡」

人間、すべての言動が賛同して欲しいわけじゃないのよ？ 否定が優しさになることもあるのよ？

そもそもそこまで目つきは悪くない。腐ってるだけだ。

握られた右手を引つ張られ、少しかがむと視界が暗くなった。

「何これ？」

「わーっ、想像以上ですねぇっ」

めぐみは鏡を見せてくる。

そこに映っていたのはH A C H I M A N バジーナであった。

「だから何これ？」

「んっ、はつきりいって臭いものに蓋っていうか。目が死んでるならサングラスっていうかあ。これって凄くないですか？ 目が隠れただけでこの違い！」

知らんがな。

だがな、これほど言ってることがボロクソでも、似合ってるって思ってることくらい伝わっている。死ぬほど恥ずい。今まで目が死んでいることを指摘した人物は数知れないが、そこを克服したらどうこうなんてことを言ったやつはいない。

「これをプレゼントしたいなあっと思って思うんですけどお」

「……好きにしろ」

「はいはい、おじいさん。お似合いですよ」

なんで俺はたった一日で神野めぐみのトゥルーエンドを迎える羽目になったんだよ。レジを終えたプレゼントをそのまま着用しての帰り道。

「お返し、期待してますからね」

「お前を更に可愛くするのは難しそうだな」

「弱点が無いですモンね」

「そうだな。これ以上可愛くなるのは不可能かもな」

「そうですねっつ、んふふ」

「お前も照れて恥ずかしくなつてのたうち回ったりしろよ……」

「も、だつて。も」

きやーきやー言いながら俺たちは帰った。

うつかりサングラスを付けたまま家に帰ると、小町がにや〜つと笑った。

「ふう〜ん。そのサングラスをめぐみちゃんかねえ〜」

かあ〜つ、恥ずかしい。小町さんめ。

めぐみよ、これが正しいからかいかただ。

やはり神野めぐみのからかい上手は間違っている。

長電話

「なんのようだ」

俺はめぐみからのLINEを取った。

こいつ以外からはかかってこないが、もう十二分にLINEを取ることに慣れたということだ。

今は夜飯食い終わって、風呂入り終わって、ベッドの上でマガジンを広げていた。この四葉ってやつはなーんとなく一色いろはに似てるんだよなあ……。

なんのようだ、とは言ったがどうせ何の用事もない。だいたいいつもこの時間帯にかかってくるんだが、今日はこんなことがあったとか、誰々ちゃんやんのか、誰々ちゃんのことを好きらしいとか他愛もない話だ。友達いねえのかこいつはと思うが、友達がいなのは俺であり、こいつは友達がいっぱいいる。

「あ、おにーさん♡ 今、ナニやってるんですか？」

「ナニはやってねえよ」

「ちよっ!? なんていきなりシモネタなんですか!？」

「ちよっとかからかってるだけだ」

そう、こいつは大した用事もなく頻繁に連絡をよこしてくる。そして、だいたい俺をからかおうとして失敗する。西方を見習って、からかうの失敗したら腕立てすることにしたら？ 筋トレして痩せたらめっちゃモテるようになるんじゃないやね？ ま、そんな筋肉にお願いしなくてもめっちゃモテるよな、ひびきちゃんもめぐみも。

そんなわけで最近はこちらからかかってやることもしばしば。

あいつは中一のかせに、えつちなアプローチを結構してくる。ただ、こちらからそういうことを言うとは意外と弱い。

攻撃力全開に割り振って、防御力がまるで無いようなやつだ。盾の勇者を見習ったほうが良いぞ。

「いい度胸ですね、おにーさん。そういうことならこっちにも考えがありますよ」

「ほう」

「実は今、ぱんつ履いてないんですよ、どうです、興奮しますか？」

「俺は脱がせないほうが好きだぞ、ぱんつも靴下も」

「えっ!?! ええっ!?! そうなんですかっ!?!」

「ぱんつはずらすのもいいが、膝のところ引っ掛けておくのもいいぞ」

「ええええっ!?!」

まあ、実体験じゃなくて漫画の話だな。

それにしても、からかおうとしてくるやつを圧倒的なパワーで反撃しちゃうのって楽しいよね。フリーザ様のような気持ちになりますよ。めぐみ、お前はもちろんヤムチャだ、オーホツホツホ。

「お、おにーさんって結構オトナですよね」

「ま、まーな」

こういうこと言われる方がよっぽど照れくさいんだよな。えつちな漫画を読んでいるだけなのに。

中一女子から見れば俺は結構大人っぽく見えるのだろうが、こちとら全然大人じゃないことは理解している。陽乃さんも俺からすれば大人だが、自分ではそうでもないと思ってるんじゃないだろうか。今度、大人扱いしてみるか。結構カワイイ反応をするかもな。

「だから、オトナの男の人が何を考えてるかア、教えてもらってもイイですか?」
「お、おう」

なんつーエグい前提なんだ。

大体、大人の男なんて大して考えてねえよ。会社行きたくねえなくとかじゃね?

「どうみてもまだ子供にしか見えない可愛い女の子から、明らかな好意を向けられたときってどう思うんですか?」

「なにそれ、九頭竜八一の話？」

「いえ、ロリペド竜王がどう思ってるかじゃなくて、オトナの男の人がですよっ」

まあ、確かに彼より俺のほうが年上だが、ロリペドだとしても天才プロ棋士だよ？
俺みたいな専業主夫志望者よりよっぽど大人だと思いますよ？

「まず、前提条件を詳しく聞こう」

「わー、めんどくさいですねー。さっさと答えればいいのに」

「ちよつと？ 俺がひねくれてるからモテないのも前提条件なんだからそこに文句言わないでね？」

「その前提条件はちよつと間違ってると思いますケド、まあいいですよ」

「どうみてもまだ子供にしか見えないってのは、どのくらいなんだ」

ここは重要だろう。小学校低学年と高学年と中学生では全然話が異なる。異なるのか？ 本当に大人だったら全部アウトなのでは？

「そ、そうですね。おっぱいはBカップです」

「ほ、ほう」

正直なところBカップと言われてもよくわからないが、埼玉県民の平均バストがAカップだから子供とは呼べないくらいあるのではないだろうか。そうじゃないと埼玉県の子はみんな子供ということになっちゃうからね！ 気にするなよ、貧乳はス

テータスだつて埼玉県のキャラが言つてたし!

「それは結構子供じゃないんじゃないか」

「そ、そうですか? えへへー♪」

なんで照れるんだよ。意味わかんねえな。

「あと可愛いってのはどのくらい可愛いんだ」

「ん、ん。そうですね、友達はみんな可愛いって言ってます」

「それじゃわかんねえだろ、友達にプスなんて言わねえからな」

「そーですか? 本人が居なければ結構言いますけど」

鬼かよ……。女つてコワイ……。

「そうですねえ、じゃああたしくらいつてことにはしておいてください」

超絶美少女じゃねえか。

「超絶美少女じゃねえか」

「ん! んく!?」

声に出た。

つて俺はいつから声に出ちやうタイプになったんだよ。僕だけがいない街かよ。

「お、お、おにーさん、あたしをからかうのは、や、やめてくださいね」

「ただの本音だから気にするな」

「あ、あ、あふう〜♡ はう〜♡」
ほ〜ん。

ほんとこいつ、こつちからからかうのには弱いのかな。別にからかって言ってるわけではないけど。

「で？ 明らかかな好意ってのは？ 男は鈍感だからな、わかってねえかもよ？」

「はあ、はあ、ふう〜。そうですね、その可能性もあります。今もちよつと思ってます……」

「え？ なんだって？ って言っておきつつ理解してるパターンもあるけどな」

プリン頭さんは鈍感野郎ではなく、難聴野郎だからな。

難聴は好意に気づいているけど無視しているわけで、鈍感野郎はガチで気づいてないわけだ。そう考えると鈍感野郎のほうが業が深い。なんで気づかないんだろうね？
どうかしてるぜ。

「例えば、例えばですよ？ 毎晩特に用事がないのに、連絡してくるとか」

「暇なんだろうな」

「えっ!?! 暇だから!?!」

「ま、俺みたいなのぼつちだったら暇なときは本読んだりゲームしたりだが、友達が多いやつは喋り相手が欲しいんじゃないかねえの」

「ま、まあそうかも知れませんが、好きじゃない人にはそんなことしないんじゃないかなあ〜?」

「いや、会話ってのは好き嫌いじゃないからな。得になる情報を持っているとか、単に話が面白いからということもあるだろう」

「あ、あはは、おにーさんってやつぱりオトナなんですな」

褒められた! 八幡褒められたよ! やったぜH A C H I M A N!

ちや、つという小さな音が聞こえる。めぐみが聞く耳を変えるためにスマホを持ち替えたのだろう。それだけ長電話をしているということか。俺たちも暇だなあ。得になる情報も持つてないし、話も面白くない俺と会話してるこいつは一体なんなんだろうね。全く理解できないな。

「じゃあ、じゃあ、ちよつと遠いのに頻繁に会いに来るとかは?」

「ついでももしれん。本命が他にあつて、そのついで。例えば湊智花は毎朝バスケゴールを借りに来るだろ? ついでに長谷川さんに会うじゃん?」

「逆ですよ逆! あんなの好きな男に会うための口実で練習してるだけですよつ!」

「おいおい、もつかんはそんなビッチじゃねえよ。清い心を持ったバスケ乙女だよ」

「かあ〜つ、まさかおにーさんがここまでとは思いませんでした〜」

露骨にがつかりするめぐみ。世の中みんなお前みたいなビッチじゃないんだよ。

大体、ロウキユーぶは純粋にバスケットが好きで小学生の女の子をエロい目で見ちゃうという背徳感を楽しむものなんだよ。だからもっかんがビッチとかありえない。いや同人誌ではそういうのもいいけど。

「じゃあ、質問を変えます。鈍感すぎる男子に好意を伝えるにはどうしたらいいですか？」

随分急に違う話題に変えたなこいつ。さっきまでと脈絡がなさすぎるだろ。

しかし難しいな、大人っていう意味ではそりやめぐみよりは年上だからアドバイスも可能だが、俺は鈍感じゃないからな。気持ちが変わらん。

「うくん、鈍感すぎる男子の気持ちは俺にはわからんが」

「……はあ」

「ため息をつくときせが逃げるぞ」

「誰のせいですか、誰の……いいから一生懸命に考えてくださいよつ、おにーさん！」
なんで怒ってるのこいつ。理不尽すぎるだろ。

「そうだなあ、好きって言っても、友達としての好きだからとか思っちゃうかもしれんし」

「そ、そこまで直接言っても駄目なんですか!？」

「まあ、鈍感すぎるんだから最悪そういうことも考えられる」

「そんな人いるのかな」

いるのかな〜って、お前がそういう前提にしたんだろう。本当にいるかどうかなんて知るか。

「恋していますと言っても、気の迷いだと思うかもしれないな」

「現実的にそんな事言う女子見たことないですよっ？」

そりゃ現実的にはそこまで鈍感なやつはいないだろうしな。

「でもな、めぐみ。伝える方法って必要なのか？」

「は？ 今までの話聞いてました？」

声のトーンがガクツと下がった。顔を見なくても怒りマークが付いているとわかる。

「おこなの？ めぐみんおこなの？」

「む。むう。……ちよつとその、むかつとしちやつたかも……ごめんなさい」

めぐみに殊勝な態度は似合わないが、こういう態度をされると少し心に来るものがある。

「めぐみ、そいつはめちやくちや可愛い女の子なんだろ。だつたら伝えなくたっていいだろ。男の方から告白されるのを待ってればいいんだ。今は子供にしか見えなくても、すぐに大きくなる」

「そ、そうですけど」

不服か。まあ、煙に巻かれたように感じるかも知れない。

「それにな、めぐみ。確実に好き同士つてなつたらつまないだろ。こいつ俺のこと好きなんじゃね？ この人私のこと好きかも？ なんて関係が一番楽しいと思わないか？ もちろんお互いを愛し合つてるのは幸せなことだが、明確じゃないほうが青春っぽいと思わないか？」

俺の青春が間違つてゐるからこそ、めぐみにはこれぞ青春つていうのを味わつて欲しい。

「んー。おにーさんがそう思つてるならそれでいいかも」

「俺のことは別にどうでも……」

「おにーさん」

「なんだ」

「あたし、今とつても楽しいです！」

それだけ言つて、切りやがった。

まあ、そうだな。

俺も楽しいわ、なんか。

人生相談

「先輩、人生相談がありますっ」

「なんだよ藪から棒に。お前はいつから高坂桐乃になったんだ」

彼女の名前は神野めぐみ。友達がやたら多い、元気でポニーテールの中学一年生の美少女だ。妹の小町の友達だったのだが、今となつては俺をターゲットにちよつかいを出してくる。

最近はからかい上手の高木さん2を見たせいか、俺をますますからかおうとしてくる。

しかし俺妹の新刊が出た影響で人生相談すら持ちかけられるとは思わなかった。この調子だと下手くそな手品につきあわされる可能性もあるな。助手としてのラッキースケベは望むところなんだけど？

「ま、とりあえず飲めよ」

「ありがとございますっ。このマツ缶つてやつ、東京には売ってないですよね。最近ちよつとハマってるんで嬉しいですよ」

この人生相談は俺が寝てるところをピンタして起こされたわけではない。事前にア

ポイントメントをきっちり取られて、うちに訪問してきたあと近所の公園まで散歩。そして突然の人生相談の切り出しである。木陰のベンチに座らせ、マツ缶を二つ買ってきたところだ。つめた〜いやつだ。

プルタブをぱかんと開け、一口舐めてからめぐみは話し始める。

「実はあだし、モテるんですよ〜?」

「いや、そうだろうよ」

こいつがモテないわけがない。実はなんて言葉はふさわしくない。意外とモテるなんてのは雪ノ下雪乃とか厄介な性格の人間に用いる言葉であって、こいつやうちの妹なんかはどう考えてもモテる。小町がモテることは許すが、小町に近寄る男は許さん。特に川なんとかさんの弟とか。

「で、またしても告白されたんですけどお〜」

「ふむ」

「あ、気になっちゃいます?」

しよつちゆうなのだろうから別に気にならない。が、俺も中学一年生相手にそこまで大人げないわけでもない。

「そうだな、めぐみが変な男に騙されてないか心配だ。兄のような気持ちで心配だ」

「む、むう〜」

露骨に不満な態度を見せるめぐみ。状況としては俺の方がかかってるんじゃないかと思えてくるが、俺は本心なのよね。小町は清纯派だからまだいいが、めぐみははっきりいって陽キャなので変なやつからもモテそう。

「相手の男の人なんですけど〜」

「うん」

「イケメンなんですよね〜。どう思います?」

「イケメンか。タイプはどうなんだ」

「ふえっ!? タイプ!?!」

「そうだよ。イケメンって言ったって要するにお前の好みかどうかが大事だろ」

「え〜つとおく、なんかこう爽やかでえ〜、スポーツが出来そうな細マッチョというかあ〜」

「そういうのがお前の好みなのか?」

「いえ、全ツ然」

「じゃあ、告白は断ろう」

「チョット待って、チョット待ってくださいいっ」

ワタワタと慌てて、目を見開くめぐみ。こんなにスピード解決したのに何が不満なのか。

ものすごく頭をフル回転させてますよ〜という顔になった後、ピコーンと電球マークが頭上に表示されるように見えるほど露骨に今考えましたという仕草を見せる。こいつ本当に見え見えだな。

「女の子ってえ〜、好きだつて言われると好みが変わっちゃうとか？　好きになった人が好みというか？　決して好みじゃないからと言つてすぐに断るかということそんなことはないというか？」

「ああ、そう」

わからんでもないので、ここは納得しておく。

あれだろ、巨乳派だつて公言してたつて、貧乳と結婚することを誰が責められるだろうかということだろ。大きかろうが小さかろうがおっぱいは素晴らしいものだ。なんかいい話なのかそうでもないのかよくわからんが。ゆきのんも希望を持ってね。

「あと彼は年上なんですけど〜？」

「どのくらいだ」

「あ、気になっちゃいます？」

「30歳過ぎだつたら即通報だ」

めぐみは交友関係が広いのでそういう相手も考えられる。ロリコンにも人権はあると思うが、俺みたいな真面目な高校生としては法律や条例を遵守させていただく。

「さ、さすがにそんなことはないですよ」

「そりやよかった。で？ 何歳なの？」

「えくつとく、先輩と同じくらいです」

「じゃあ、やめとけ」

「ええくくくつ!!? な、何ですすかつ!!?」

「え？ なんでお前怒ってるの？」

食って掛かってきそうなめぐみは、ベンチに両手をつきつつ顔を俺に近づける。めぐみは怒って赤い顔だとしても顔が近いと俺は違う意味で顔が赤くなるからヤメてね？

「いや、俺と同じ年齢だったらもうなんというか……」

おじさんと同じでやりたいだけかもしれないというのはさすがに言いづらい。俺もそうだと同じことになるからな。俺はなんというかこいつのことは大事にしたい……。

「おにーさんと同じ年齢なんて凄く魅力的ですけどねっ!! 付き合ってもいいかもかもしれないですけど?」

はー。俺の親父もこんな気持ちになるのだろうか。小町がこんな事言いだしたら俺はもうどうしていいかわからん。

「やめておけ。本当にお前のことが好きだったら、この時点で告白しない。お前が大きくなって、大手を振って一緒に居られるまで我慢するだろうよ」

「え！ ええっ!? それって、それって、そういうことですか?!」
「どういうことだよ……」

こいつは本当に俺をからかう気があるの？ 空回りにもほどがあるよ？

「そもそも、そもそもですよ？ 先輩と同じくらいの年齢で、あたしが嫌いじゃないタイプの男性だったらどう思うんですか？」

「どう思うも何も。お前がどう思うか次第としか言いようがないだろ」

「ん—— も——！ 可愛くないっ！」

そもそも俺がカワイイ可能性があると思っっているならどうかしている。それを求めるなら戸塚のところへ行け。傲慢じゃないが、俺は可愛くなさには定評がある。平塚先生に「可愛くないね、君は」とか言われると逆に嬉しくなっちゃうまである。

「はー、もうあたしが何か変な男の人に良いようにされたらどうするんですか？」

珍しくしよんぼりと肩を落として、神野めぐみは声を漏らす。

「そうなる前に相談してくれたことは感謝してる。そうなたらどうなるかわからん」
少しだけ、語気が強くなってしまったかもしれない。想像することすら脳が拒否する。

「えっ!? ええっ!?」

嬉しそうな態度を見せるが俺は何一つ愉快ではない。

「あのな、めぐみ。お前は自覚を持つべきだ」

「え。なんですか、真剣な顔で……ちよつと怖い……ような……」

珍しくも怯えた表情を見せるが、俺はちよつと苛立っていた。このままだと怖がらせてしまうかもしれない。それは本意ではないので、ちよつと軌道修正しておく。

「お前はね、自分でも可愛いと思ってるだろうけど、お前が思ってる以上に可愛いんだよ」

「え！ なんかもものすごく恥ずかしいんですけど?! でももつと言って下さいっ！」

「中学一年生にしてはえつちな身体をしてるというのも理解はしてるのだろうが、男子はもつと思ってるんだよ」

「さつきよりももつと恥ずかしいですけど?! でももつと言って下さいっ！」

「お前は女の子としての魅力が溢れかえってるんだよ」

「んっふふー。あたしの満足度ももう溢れかえってますっ」

さつきまで不安だった顔はどこへやら、スイーツバイキングを終えたかのように頬をツヤツヤとさせている。しかしこんな下手くそなからかい方をしてきためぐみを俺は許さん。何が人生相談だ。

告白されたことが真実なのかどうかはどうでもいい。だが、それをネタにこいつが俺をやきもきさせようとしていることは明白だ。わかっているも若干していると

尚更許せん。よつて反撃させてもらう。

「めぐみ。お前が誰と付き合うかは自由だ。けどな、俺が歓迎するわけないだろ」

「え、ええっ!?! そ、それつて、それつて!?!」

「それはな、俺がお前を、一番……」

「一番……!?!」

「妹よりも、誰よりも……」

「妹よりも? 誰よりも?」

うららかな日差しをバックに浴びて、あまりにも緊張しまくってるめぐみを見ながら、俺は吹き出しそうになるのを必死で堪える。ほんとこいつ、からかい甲斐があるな。

「必死でお願いすれば、えっちなことをさせてくれるやつだと思ってる」

「え! ええ! ええええ!?!」

「俺以外の男もきつとそう思っている。だからやめとけ」

俺のセリフをどう受け止めたのか、めぐみはひたすら顔を赤くしている。口はずつとモニヨモニヨ動いているが、なんと言っているのかわからないのだろう。セクハラだつて怒り出せばいいのか、お願いされてもしませんよと否定すればいいのか、それとも本当にお願いされたらどうしようと考えたらいいのか……そんなところだろうか。

「ふふふ……ははは……くくく……」

「ええ？ ええ？ なんぞ？」

困惑するめぐみが可愛くて、ますます面白くなってしまう。こいつは未だに自分がか
らかっている側だと信じて疑っていないのだ。とつくに攻守は逆転しているのに。

だから。

あまりにも俺の大勝利だから。

きつと彼女が満足するであろう言葉をお返しに。

「いいから、俺以外の男の告白なんて断れ。な？」

「う、うん。うんっ♡ えへへ♡」

めぐみ相手に圧勝するのは、いささかバツが悪い。

俺は高木さんじゃないから、引き分けくらいが丁度いいだろう。

公園のベンチで飲むマツ缶は、いつにもまして甘くて美味かった。

麻雀

「小町ほんとにココに居なきや駄目〜?」

「そりゃ四人じやなきや麻雀にならんしな」

俺たちはこたつの板を裏返して麻雀牌を並べていた。年末年始だけは家族で麻雀を打つので、俺も小町も一応は打つことが出来る。まあ、俺はゲームでもやるけど。

「小町ちゃんが居ないと困るんですよ〜」

そう言うのはこの麻雀大会の企画者である神野めぐみ。俺は彼女の要望で妹と、東京都足立区にある住宅にやって来ていた。めぐみは正面、小町は俺の右に座っている。

「そう! そうだよ! 小町ちゃん可愛いよ!」

小町が可愛いのは当然だが、この少女もなかなかの美少女だった。俺の左に座っている。

「いや、この娘の方が可愛いでしょ……誰なの」

「この御方は……いやこの少女はな、いろいろな理由があつて家の外に出るのが苦手なんだ」

「へ〜。お兄ちゃんみたいだね」

「そういう次元じゃないの。学校も行っていないの」

「あー、そうなんだ」

「それでな、めぐみは彼女が学校に行けるように努力してるんだ。今回のもその一環というわけだ。どうだ、協力してあげたいだろ？」

「くあく。お兄ちゃんは依頼となれば全部全力なんだから。まあそういうところ嫌いじゃないけど。今の小町的にポイント高いなあ〜」

「おう。だから負けないようにな」

そう言つて、俺はめぐみと目配せをする。当然だが、小町には本当のルールを教えるわけにはいかない。

めぐみは彼女を、和泉紗霧と仲良くしたい、学校に連れていきたいというのは本当だ。ではなぜ麻雀なのか。

簡単だ。麻雀といえば脱衣麻雀だろ。

この和泉紗霧は、なんとあのエロマンガ先生なのだという。あの転生の銀狼のイラストレーター。

そして彼女はイラストを描くために美少女を生で見たいのだという。もちろん我が妹はめちやくちや可愛いので、ぜひ生で見たいと。できれば下着姿を。

そんなの無理に決まってると思つたので拒否するつもりだったのだが、イラスト付き

サイン色紙が貰えるということであつさり俺はめぐみに協力することを決めた。

脱いでくれとはとても言えないので、脱衣麻雀をする流れに持ち込んだというわけだ。

それが愛する妹が脱衣することになるかもしれないとしてもだ……。いや、正直問題ないだろ。だって見るのが男だったら話は別だよ？ めぐみとそのお友達の少女が見るだけでしょ。

「まーじゃん、がんばる」

紗霧ちゃんは両手に握りこぶしを作っていた。しかしまあこの子が麻雀が上手いとはとても思えない。余裕だろうね。大体俺とめぐみは共闘関係だ。通しサインだつて出来る。

「つも。ろくせんおーる」

……つえ〜。

はつきり言つて紗霧ちゃんはめちやくちや強かつた。

こうなつたら、バレバレでもいいからめぐみに振り込もう。脱ぐのは最下位だけだ。俺が最下位になれば問題ない。

「小町ちゃん、うへへ……どんな下着なんだろ……」

「ひいっ!? お兄ちゃん、なんかこの子、小町を見る目が怖いよっ?」

「すまん、小町。この子はお前の下着姿の絵を描きたいんだそうだ」

「ええー!? 小町聞いてないよ!?」

悪いな小町。お前は麻雀で負けたら脱ぐんだよ。つてどんなクソ兄貴だと思うけど、さつきも言ったとおり見るのは女子だから別によくね?

「逆に言わせてもらうが、麻雀をする際にどんなルールなのかちゃんと聞かなかつた小町、お前が悪いんだ」

「え、ええー!? お兄ちゃんは小町の下着姿を見たいの!?!」

ははは。そういうアホなことを言い出すのも想定通り。

「安心しろ、小町。兄貴は妹の下着で興奮したりしない。えつちな気持ちになんかならない」

「ぐふーっ!」

突然に紗霧ちゃんは突つ伏した。どしたのわさわさ。俺は小町に言ったんだけど?

「ちよ、ちよつと今のセリフで、だ、だめくじが」

なぜか紗霧ちゃんは薄い胸を抑えていた。

今のセリフでなぜダメージを? 兄貴にエロい目で見られたい妹なんかいるか?

「いや、そういうことじゃなく小町は下着姿をお兄ちゃんになんて普通に見られたくないんだけど……めぐみちゃんもヤダよね?」

「えっ?! あ、あたしは、おにーさんが見たいんだったら、見せてもいいかもです♡」
めぐみのやつ……他の友達がいても俺をからかおうとしとるな。現状では紗霧ちゃんをエロい目で見ているなんてことになったら俺はおしまいなので、ここはきっぱりと言っておこう。

「大丈夫だ。男子高校生が中学一年のお子様をエロい目で見ることもない」

「ぐはーっ!」「ぐふーっ!」

めぐみだけではなく、紗霧ちゃんもダメージを受けていた。なんで? 俺にエロい目で見られたいの? そんなわけねえよな……。

「め、めぐみちゃんくらい可愛くてえっちでもお子様扱いなんて……」

「そんなことないよっ!! 和泉ちゃんだって可愛くてえっちだよっ!!」

「ちよつと、お兄ちゃんのせいで美少女たちがお互いを変に励ましあつてるよー? ど
うすんの」

え? 俺が悪いの?

三人共が俺をジト目で睨んでいた。セクハラをしたならわかるが、それを回避してこ
うなったのは理不尽だろ……。

「はっ、勝てば良いんだ勝てば」

「うわー、みんなを裸にしてやろうとかゲスいよー、やだよこんなお兄ちゃん」

「じゃあ、負けてやろうか。お前らみんな俺の裸を見る」

「うわー、気持ち悪いよー、最悪だよお兄ちゃん」

絶望した！ どうあがいても絶望した！

「小町ちゃん、脱がす」

紗霧ちゃんは戦意を回復したようだった。

「小町ももう本気で行くよ」

小町もなぜかやる気になったようだ。

「脱いで、おにーさんを興奮させます！」

めぐみだけは負けようとしていた。なんだこいつ。ここで興奮したら俺の人生終わりだよ？ 絶対に負けられない戦いがここにある。

——二時間後。半荘を四回終了。

俺と小町とめぐみが上着を脱いで、めぐみが二度目の負けとなった。

「負けちゃいましたねっ」

「なんで嬉しそうなんだよ」

「わくわく」

名譽のために言っておくと、わくわくしたのは俺ではなく紗霧ちゃんだ。

彼女はもうサンタクロースからのプレゼントを開ける間際のように両手の握りこぶ

しをぶんぶん振って目をキラキラとさせている。

「じゃあ、よいしょっと」

「おい、なんでもうスカートに手をかけるんだ」

上着しか脱いでない状態でもうスカートを脱ぐというのはおかしい。まあシャツを脱いだらブラが見えてしまうだろうが。普通は靴下を脱ぐだろ。

「だって、おにーさんは靴下を最後まで脱がさないって言ってたじゃないですか」
「ぶふーっ！」

妹がいるのになんてこと言っちゃってしてくれてるのこいつ！

「ごみいちゃん……」

「見るな。俺を見るな」

「わかる！ 靴下はじゆうよう」

紗霧ちゃんからは同意を得たが、嬉しくはない。

「でも、さきにはんつを脱ぐのはどう？」

紗霧ちゃんは謎のアドバイスをした。まあでも脱いだばんつを俺に見せる必要はないから、賢い選択なのかもしれない。ばんつを脱いでもスカートを脱いでいなければ実質何の意味もない。確かにそうだ。

「でも、おにーさんはばんつもずらしたり、ひぎに引っ掛けるタイプだって」

「おおおお……おおお……」

人からかえば穴二つ。まさかそれを実妹の前で暴露されるとはね。

小町はもはや何も言わなくなってしまうた。くっころ。

「小町ちゃんのおにーさん、その話詳しくおしえて」

「勘弁してください……」

セクハラをされているのは俺なんじゃないかと思えてくるね。

結局めぐみはスカートを脱いだ。シャツでぱんつは隠れているから見えない。べ、べ、べに見たつてお子様のぱんつなんて興奮しないんだからねつ。

「おにーさん、そんなにあたしの脚、気になりますう？」

そうだね、正面だから見えづらいよね。

「めぐみちゃん、せくしー」

紗霧ちゃんからはよく見えるようですね。そこまで羨ましくはないけどね。

「ごみいちゃん……いや、クソゴミ。それ、チー」

「待って、それはやめてくれないかなー。ただの中傷はお兄ちゃんつらいなー」

捨て牌ですら出しにくいなー。チーすらしたくないと言わんばかりに嫌われてるなー。それにしても対面に座ってる人の太ももは見えにくいなー。

「あ、それポンです」

俺の捨て牌を取ろうとめぐみが腰を上げる。シャツの下の部分からちらつと脚が見えた。

「うわー、ラッキーチャンスでしたね、おにーさん。食い入るように見ちゃつてまあ♡」

「そ、そこまで見てないし?」

「おい、クソゴミ、さっさと捨てろ」

「ちよつと!? 今のセリフは本当に小町なの? 俺が悪かったの? 百万回死んで生まれ変わるから許して小町?」

いまだかつて見たことがない表情の妹は、なんだかんだでその後振り込んでしまい、点棒がマイナスとなって飛んだ。

「小町……」

「わくわく。小町ちゃん、楽しみ」

「いや、小町は普通に靴下を脱ぐんで」

普通に靴下を脱ぐだけなのに、なんで俺を睨むの?

次の半荘はめぐみが負けたが、シャツを脱ごうとした矢先に小町が「靴下が先」とだけ言って全員が無言で従うという結果に。

いよいよ夕方になり、そろそろ帰りたい雰囲気醸し出した頃。

「小町ちゃんの、下着みたい」

「ん〜、別にモデルならいいですよ?」

「え?」

俺たちの存在理由が速攻で消し飛び、小町は紗霧ちゃんの部屋で小一時間ほどモデルをこなして解散となった。俺たちの苦労は何だったの?

「おにーさん、ほんとに中学一年のカラダには興味無いんですか?」

「ねえよ」

「つていうことは、こうしたり、こうしても?」

「ね、ねえつて」

「こーんな風にしたりこーんな風にしてもですか?」

エロマンガ先生、うちの妹なんかよりこいつのほうが絶対、えっちなイラストの参考になると思うのですけど……?」

妹が戻ってきたとき、俺は救世主だと思つたがそれは勘違いだった。俺を罵るならともかく、両親に謝るのはやめて欲しいですね? 俺は被害者なんですよ? とりあえず撮影をやめて?

夏祭り

「夏祭り、誰か誘ってくれないかな♡」

「おお、行くか？」

うちわを仰ぐ手を止めないままに即答したところ、非常に不機嫌そうな表情になったのは神野めぐみ。俺は千葉市で彼女は足立区なので、今はビデオ通話中だ。

「なんでさらつと誘ってくれちゃってるんですかっ。ぼっちでコミュ障のくせにこういうときだけ」

「いや、だつて誘ってくれて言ってるようなもんだろそれ」

そう言いつつも、こいつのやりたかったことはもうわかっていた。

からかい上手の高木さん2でやってた告白の回を見て真似をしたいと思つたのだから。西片はよく頑張つて夏祭りに誘つたと思うが、俺がめぐみを誘うのになぜ勇気を振り絞る必要があるんだ。戸塚ならまだしも。

「もお行く気なくなっちゃいましたよっ」

「じゃ、やめるか」

「嘘ですっ！ 行きますす！ 連れてってくださいっ」

まったく素直ないい子だな。俺と違って。こういうところは可愛いんだよなあ……。

ここまでがアポイントの話で、今は夏祭り当日、夕方5時。

とは言ってもクソ暑いし全然日なんか傾いてない。セミもうるさいし帰りたいたい。なんで誘ってしまったんだ……。ちなみに携帯を忘れてくるなんてドジは当然しない。

駅の改札を抜けるとすでにめぐみは待っていた。ま、向こうは電車に乗る必要もない地元民だ。先に着いているのは当然の礼儀と言えよう。

それはいいが、おっさんから「可愛いね」などと話しかけられて手を振りながら「ありがとー」などと返してるあたりカルチャーショックを覚える。なんなの、あいつはアイドルかなんかなの？

確かに彼女の浴衣姿はとびつきり似合っていて、イタリア人なら声をかけるのが当然という感じだが、日本人でも言っちゃうれベルなのかしらん。

白い浴衣に朝顔の柄、赤い帯にポニーテール。どつからどうみても偽ビッチとは思えない清楚可憐なお嬢様だ。こいつの隣に俺がいたら通報されないかな……。

「あ、おにーさん！」

「よお」

下駄をからころさせて近づいてくるめぐみ。こりや浴衣を褒めないわけにもいかないが、俺が女の子をうまく褒めるとか超無理なんだよなあ。

「すごい！ 浴衣すっごく似合ってるじゃないですかっ！ 黒くて大人っぽくてめっちゃくちゃカッコイイですよっ!」

褒められなくて困っていたら褒められてしまった。俺なんかはこの美辞麗句がスラスラでてくるとは、これが本物の陽キャなのか……コミュ力があるなんてもんじやない、化け物だよ。化物語だよ。やれやれ。

「いや、大したことないだろ」

「大したことありますよっ！ もともとカッコイイとは思ってましたけど、今まで一番カッコイイですよっ!」 夏祭りに誘ってよかった。あ、違った、誘われてよかった

「」
思わず手で顔を覆う。こいつはからかおうとしてくるときはド下手くそだが、普通に素直に話するときはこちらが恥ずかしくて仕方がない状況に陥る。またこれが本心だつて丸わかりなところがより照れくさい。まごうことなき本音なんだよなあ。

後頭部を掻きつつ、歩きだすとめぐみはとてつと前に行つて案内を開始した。ぺちやくちやと延々と喋っているめぐみの話を適当に聞きつつ、神社へ向かう。

神社で行われる夏祭りにはかなり大規模であるようだ。マジで人が多すぎるだろ……。

「んっふっふっ。ほら」

手を差し出すめぐみ。ま、手をつないでおいた方がいいだろう。暗くなってきたし、この混雑では確実にはぐれる。携帯は持つてるけどな。

「あいよ」

「ちよつと!? 少しは恥ずかしがってくださいいよお〜つ」

「はぐれると面倒くさいからな」

「ん〜つ、も〜つ」

ぶんむくれながら握ってる手をにぎにぎしてくるさまは大層可愛いのだが、それは言わない。さすがにそれを言うのは恥ずかしいからな。

「で、どのお面買うの? プリキュア? オヨルンの? 買ってやろうか?」

「なんで疑問形と思わせつつほとんど決まってるんですか?! いませんよつ、子供じゃないんだからそんなのもう見てませんっ」

「ええ……むしろ大人になってから見始めたと言ってもいいんだけど」

「どつちにしろお面なんかありませんよつ」

お面を欲しがると長門つぼくていいのに……ってこいつと長門は似ても似つかないが。真逆と言つても過言じゃないから欲しがらないのが正解なのか。

「や〜つぱりい〜、りんご飴ですかね〜♪ あ、でももおにーさんはチョコバナナの方が嬉しかったり〜? もう、このえつち!」

おいしい絶好調だな。別にチョコバナナ程度でエロいことなんか考えねえよ。

むしろりんご飴の方がエロいような気もするがな。俺はりんご飴はほとんどりんごなので評価しない。飴というならもつと甘くあるべきなんだよ。コーヒーもな。

あんず飴と看板に書かれた店には、りんご飴とあんず飴の他にみかん飴とすもも飴が売られていた。

「まあ、俺はすもも飴買うけどな」

「えっ、えっ、じゃああたしも」

「おじさん、すもも飴を2つくれ」

「毎度！ 可愛い彼女だね」

「そっすね」

受け取ったすもも飴をめぐみに渡そうとすると、わかりやすく照れていた。なんでだよ、さつき駅ではアイドル並みの返ししてたのに。

「可愛い彼女っていうの、思ってたんですねっ」

すもも飴を顔の近くに見せながら、すももより頬が赤くなる。つまりあれか、こいつはおつちゃん可愛い彼女だねっていうセリフではなく俺のそっすねという肯定に対して照れているわけか。どんだけ純情なんだよ。

思わずがぶりと大きめにすもも飴をかじる。甘酸っぱいなあ、まったく。

「おにーさん、そろそろ手を離しませんかっ」

「やだよ」

「えっ、えっ、それって」

「お前わざとはぐれようとしてんだろ。面倒くさいからね？」

「ちえ〜〜〜」

「ここにこ笑つてるときより不貞腐れてるときの方が魅力的な人間もいるんだな。雪ノ下が不機嫌だと最悪なのにね？」

「あ〜っ、あそこ！ 金魚すくいで勝負しますよっ」

「いや、金魚貰つても困るし。やらね」

「そしたら一匹しか捕れなかった小さな子どもにあげればいいじゃないですかっ」

「お前、どんだけ高木さん好きなの？ たこ焼きをあーんしてやれば満足なの？」

「結局あーん出来ないのがいいんですよっ」

「いや、それくらい普通に出来るし……」

「ここまで熱烈に再現したいならしてやってもいいかなと思ひ始めてきたよ。むしろ、おもむろに将棋を始めて勝つたら告白するまでやってもいい。」

「じゃあ輪投げするのか」

「そうですね〜、かんざし欲しいですし」

「それは言っちゃ駄目なんじゃね？」

輪投げなんて本当にあるのかと思つたが、存在していた。まあろくなものが貰えなさそうだが。

「じゃあ勝負ですよっ」

「ああ」

まあ、見回りの先生が来ないから俺の勝ちだな。

一つ目はハズレ。

二つ目が五点か。

三つ目は……。

「比企谷。随分と若い彼女だな」

「うわーっ!? 平塚先生!?!」

なんでここに先生が!?! とはいえ残念ながら平塚先生にサービスショットは発生しません。

それにしても輪投げ勝負の途中で先生がやってくるとかいうレアイベントなのでここだけ再現されるんだよ! 強面の男教師よりはるかに怖いんだけど!?!

大体、千葉ならまだしもなんで足立区に?!

「淫行じゃないだろうな」

「とととと、とんでもない」

「しかし、若いなあ」

「ははは」

「なんだ比企谷。そんなに若くない私が滑稽か」

「滅相も有りません」

「ふん……」

「平塚先生こそ、なんでこんなところに」

「甥っ子がこつちでな。なんせ結婚してないし子供がいらないから甥っ子が可愛くて可愛くて仕方ないんだ」

それか。平塚先生は焼きそばやたこ焼きではなく、ベビーカーカステラだの水風船のヨーヨーだの似つかわしくないお子様向けのアイテムで手が埋まっていた。誰か、誰か早く貰ってあげて！

「え〜っ、誰ですか〜？ この綺麗な女の人〜？ 先生なんですか？」

突然やってきた美人教師に対しても余裕で話しかけるコミュ力おぼけ。

「平塚だ。比企谷の高校の教師をやっている」

「神野めぐみで〜っす♪ わ〜、高校にこんな美人教師がいたら男子がほっとなかないでしよ〜？」

「ぐふうっ」

「同僚の教師とか生徒のお父さんからモテちゃいそうですねっ」

「ぐはあっ」

「あ、でももうとつくに彼氏さんがいますよね。美人さんですもんねっ」

「……比企谷」

平塚先生はライフがゼロになったらしい。褒めちぎってる相手に怒ることも出来ないし、相手は子供だし、否定するのも悲しいし、と完全に打つ手なしだ。なんかごめんね？

「めぐみ、お前の番だぞ」

「あ、そうですねっ」

めぐみには輪投げをさせておくことにした。平塚先生の心のケアをしないとこのままではあまりに不憫だからな。

「あー、美人の平塚先生」

「なんだ。見え透いた慰めなど通用しないぞ。ぐすっ」

メンタル弱えろ。よくぞここまでやってくれたな、神野さんめえろ。

「えーつと、ところで先生は浴衣じゃないんですね」

「なんだ、見たかったのか比企谷」

「ま、まあそうですね。目の保養はいくらでもしたいですよ、目つき悪いんで」

「ふん、おべっかなんか使いやがって。……まあ嫌な気持ちはしない。せいぜい若い彼女とよろしくやれよ、じゃあな」

本当に彼女だと思ってるのか、そうじゃないと思つて冷やかしているのかわかりずらいな……。ま、どつちでもいいか。平塚先生は綿あめやらかき氷やらを甥に渡す義務を果たしに行つた。幸あれ。

「あ、おにーさん！ 輪投げ、あたしの勝ちですよっ」

「ああ。そう。おめつとさん」

「ちよつとお!? 負けたんだから悔しがってくださいよっ?」

「神野さんめー。これでいいか?」

「くわゝつ、全然面白くない」

「はいはい。景品は?」

おつちゃんが用意していたおもちゃは三種類だった。対して選べないし、本当に安つちいものばかりだ。

当然かんざしなんか無し。ま、そんなもんだよな。そんなもんだよ。

この中で選ぶとしたら、これしかないか。嫌だなあ。

「おにーさんっ、ちよつと手を出してください」

この先も想像がつくんだけど。

「ちよつとっ!? 入んないんじゃないですかっ!?」

「こんな子供向けのおもちやの指輪が男子高校生の薬指に入るわけないだろ……っついてい
うかなんで結婚しようとしてんの?」

「けっ、けっ、結婚っ!?」

「なんで面食らってるんだよ。そういうことだろ、これ」

指輪の交換の真似事なんかしやがって。それこそ平塚先生に見られたらどうするの
? 命が危険だよ?

「小指にも入らないー」

「泣きそうな顔をするな」

「だつてえ〜」

こういうガキつばいところには弱いんだよなあ……お兄ちゃんスキルが発動しちや
う、悲しい性。

「ほら、お前の小指にはびつたりだ」

「えっ、えっ? くれるんですか?」

「そりゃ俺がおもちやの指輪持つてても意味ないしな……」

「恋のおまじないのピンキーリング……」

なにそれ。そういうのわかんないんだけど。サイズの他の指には入らないから小指に入れただけなんだけど。

「お前のくれた指輪は、財布にでも入れておくわ」

「……」

普段クソやかましい女がこういふとき黙るのズルいよな……。

「線香花火買いに行くか？」

「……はいっ♡」

二人羽織

「おにーさん、今度学校で二人羽織をするから練習相手になつてください♡」

「嘘だな」

「なっ!? なんですぐに嘘だつていうんですかーっ!?」

「いや、そりゃ二人羽織をするのに本番と違う奴と練習してどうすんだよ」

二人で行うものを別の人間とおこなつて練習になるものかよ。ちよつと考えればわかるだろ。二人羽織つてなんとなく体が密着するからからかえるなどか思つただけだろ。

「相手は紗霧ちゃんなんです」

「む」

そう言われると弱い。彼女は一緒に遊んでいたときは元気に見えたが、基本的に家から出ることをすら出来ないという。じゃあ本番を行うこともないだろう、と切つて捨てるのはいささか胸が痛む。

「わかつたよ、断ると夢見が悪いからな」

「そう言つてくれると思ひましたよっ、優しいおにーさん」

手玉に取られている感があるが、やむを得ない。

そもそも休みの日にわざわざ足立区から千葉までやって来ている相手にさっさと帰れとはさすがの俺も言えない。

「さて、おにーさんは前からしたいですか？ それとも後ろから？」

まーたそういう言い方をして俺をからかおうとしているのか。やれやれ。

「俺は上に乗って欲しいけどな」

「う、うえっ!？」

「騎乗位……ごほんごほん、えつと騎乗位っていうんだが」

「咳払いの後で言い直すのかと思ったら、そのまま言った!？」

俺のカウンターアタックはかなりの攻撃力だったらしく、神野めぐみは目をこんななかつへにして顔を茹でダコのように赤らめる。騎乗位という言葉を理解する程度にはマせているが、聞いただけで動転するくらいウブということだ。

「ま、冗談はともかく。どっちでもいいぞ」

「むー」

むくれた。そっちは仕掛けてくるくせにこっちがするとそれだもんな。でも、別に俺の心は痛まない。どっちかというとはっこりするね。だってほつぺたを膨らませてるだけだし。

「じゃ、じゃあ最初は後ろから包み込んであげますよっ」

大きめの羽織に袖を通し、カーペットの上に正座する。

めぐみは俺の後ろへ。で、腕を前に……

ぼいん

うん。わかってた。当ててくることはわかってた。むしろしてくれなかったらふぎけるなと思うくらい。でも、実際にしてもらおうとありがたすぎて困るな。

「あ、当たってるぞ」

「当たってるんですよっ♡」

わかってるけどな。やっておかないといけないお約束ってやつだな。

「あれ、箸は？」

「箸はアブナイってことで使わないんです。大福が載っているお盆を持ってください」

「ほーん」

これか。大福が三つほど置いてある。

「これを俺が持つて待つのか」

「そうです」

普通に両手で持つとへそのあたりにお盆がくる。

「じゃ、行きますよお〜」

首筋に息がかかって、ぞくりとする。

背中に当たつて膨らみももぞもぞと動く。

そしてめぐみは俺のへその辺りの方へ手を動かす……

「あ、やわらかい。これかな、ふにふに」

大福よりもやわらかいものを軽く揉まれる。ズボン越しなんだから手触りでわからないものかね。なんというか気持ちいいと言うより不安。強く握られたらどうしようという生殺与奪権を握られたことによる恐怖。

「……違う、もつと上だ」

「もうちよつと上? え、でもこれ凄く硬いですケド」

「ううっ!? そ、それじゃ、ない」

「なんですかコレ」

「い、いいから握るな」

この世には知らないほうが幸せなことも多い。言う必要はあるまい。

どうやら背中の感触によって硬くなっていたようですね。

「も、もつと上だ」

「うーん、あ、これがお盆か」

「そうそう」

「さっきのお盆より硬いものは一体……」

「それはもういい、忘れろ」

お盆より硬いは言いすぎだろ。わざと言ってるんじゃないだろうな……

疑問に思ってる間にようやくめぐみの手が大福を掴んだ。

「あ、これですね」

「そうそう」

「えいやっ」

「……お前わざとだろ」

めぐみは勢いよく俺の頬に大福を押し付けた。

「んふふっ」

心底愉快そうに笑った。くそ、怒れないじゃねーか。

「もうちよつと下だ」

「えいやー」

「目はやめろ、目は!」

大福の粉が目に入るのだけは絶対に許さん。っていうか位置が上がつてるから。あと背中当たってたものが肩に当たってるから。それはいいけど。全然いいけど。もう粉が目に入っても許しそうだけど。

「この辺かな〜」

「そうだよ。……食ったぞ」

「どーでした？」

「けっこう美味しい」

「いや、そーじゃなくて！ 二人羽織の感想ですよっ」

「あー、そっちか。気持ちよかつたぞ」

背中と肩もそうだが、やわらかいものと硬いものを触ってもらったのが特に。なんて絶対に言わないけどね!!

「……気持ちよかつた？」

当然の疑問だった。そもそも気持ちよかつたことを言っただけじゃなかった。でも他に感想なんかないだろ。

「あー、なんつーかあれだ。あんまり人に食わせてもらうことってないからな」
我ながらナイスなごまかしだ。

「あはは、おにーさんが言ってくれば、いつでもあーんしてあげますよっ？」

「お、おう」

あぶねー。俺の硬いものをあーんしてくれるかと思っただけじゃなかった。いかんいかん。

「じゃあ、交代ですなっ」

「あいよ」

デカ目の半纏みたいなものを羽織って、後ろから抱きつく。うつわー、小さい体だなあ……。

「……俺じゃ駄目か？」

「は？」

「いや、ちよつと言いたくなつて言つちやだけだから忘れてくれ……」

若い女の子にオヤジギヤグ言つちやうおっさんつて悪気がないんだろ……。なんか言わずにはいられないというか……。

「で、大福はどこにあるんだよ」

「おへそのあたりです」

うーん。これか？ 豆大福かな？ ふによふによしてるけど、柔らかかすぎる気もする。なんか触ってるうちに豆が大きくなってない？

「そ、それはつ、ち、違いますっ。だ、だめ、もう触らないでくださいっ、ひうん♡」

……なんだったのかはわからないほうが良さそうだ。この世には知らないほうが幸せなことも多い。(二度目) わざとじゃないからね？

手を下に落とすと、普通に腕に触れたので、そこからつたつて大福にたどり着いた。粉にまみれているので間違えようなどない。間違えようないじゃん!?

大福を掴むと、俺は手をそのまま上に。顔にポニーテールが当たる。否が応でもいい匂いが鼻から流れ込んでくる。シトラスやらミルクやらフローラルやらが混ぜこぜになった、女の子の匂い。くらくらする。

「あの一、口の前で止まってるんですけど〜」
「はっ。」

それでよくね？ 何言ってるの？

「それじゃウケないじゃないですかっ!？」

「そういうやつなのかよ……」

なんだ、勝ちに行くやつじゃなくて笑いを取るやつかよ。っていうかじゃあ尚更俺と練習しても意味ないだろ。

「ぱいぱい」

「ちよっと!？」 大福はファンデーションじゃないんですけどっ!？」

大福でほっぺたをポンポンしたら、なかなかの好リアクションだった。

「こういうことか？」

「そうですっ！ もう勝ったも同然ですっねっ!？」

いや俺は出場しないけどな。エロマンガ先生はこんなことしなれないと思えますよ？

ま、なんにせよ練習は終わりだ。こんなときくらい甘いコーヒーより緑茶が飲みたく

なる。

「じゃ、お茶淹れるわ」

「あ、ありがとうーございますっ」

「こちらこそ、ごちそうさまでした」

「？ 大福のことですか？」

「豆大福のことだよ……とは言えないな……。」

ハロウィン

「うわー、見事なゾンビですつ。目が完全に腐ってますね」

「ちよつと？　いつもとおんなじなんだけど？　なんならぐつすり眠れたくらいなんだけど？」

「じょーくですよ、じょーく！　ハッピーハロウィン♪」

「少しもハッピーじゃねえよ」

俺は脅されて神野めぐみの地元の方までやって来ていた。こいつはあろうことか渋谷でハロウィンに参加するなどとのたまったのである。友達がアホほどいる陽キャのめぐみとしてはある意味当然の流れなのかもしれないが、中学一年生の偽ビッチであるめぐみが一番行つてはいけけない場所としか言いようがない。ダメ、ゼツタイ。本当にいたずらされちゃう！

俺が足立区までハロウィン当日に行くというなら、渋谷行きはキャンセルすると言うので仕方なくやって来ていた。それでもしなければ俺がハロウィンなんて参加するわけがない。

「参加してみたら楽しいんじゃないですかっ？」

「クソつまんねえよ」

「ほくらね。……つてええつ!？」

「なんで驚いてるの? 思ったとおりつまんないんだけど? 苦痛なんだけど?」

知らない奴らが、変な格好をしているのを見て何が面白いというのか。ガキンチョがお菓子を貰って嬉しいというのはわかるが、俺はもうそういう年齢ではない。

テレビなどで見る渋谷のハロウィンとは異なり、地域のお子様为主体ではあるが、中学生や高校生、大人も混じって仮装大会が行われていた。

「なんでですかっつ! ほら、見てくださいよお」

血まみれのナース服でくると回るめぐみ。ハロウィンとしては割りと定番の仮装であるらしい。似たような格好のお姉さんもいた。

そりゃピンク色のナース服に白いニーハイソックスは非常に魅力的だが、たっぷり浴びた返り血のようなものと悪魔の角みたいなのが邪魔だった。どういう状況なんだよ。

「可愛いでしょっ?」

「いや、俺にそういう猟奇的な趣味ないから。血まみれとか八幡的にポイント低いから」
「ええ〜!？」

いや、これに関しては俺が普通なんだと思うよ? これでも可愛いと思うほうが性格が

ひねくれています。俺が言うのだから間違いない。俺より性格がひねくれているとか、ちよつと日常生活に支障があると思いますよ？

「お。あの人ならいいけどな」

「え？ ちよつと。それっておっぱいが大きいからですか……？」

「ばっ！ 違えよ……あれは、はたらく細胞のマクロファージさんのコスプレだろ？だから返り血に意味があるって話だよ」

「えええ。何言ってるかわかりませんケド、ゼツタイおっぱい見てますよねえ」

くつ。こういう決めつけはむしろセクハラではないだろうか。あくまでもマクロファージさんの設定として胸の大きさも準拠しているな、と確認しているだけだ。はたらく細胞は好きだが、働きたくはない。

「ゼツタイかわいいのにな」

そう言いながら、胸元を開けるめぐみ。やめなさい。誰が見ているかわからんのだ。うっかり撮影されてSNSに投稿されちゃったらどうするの!?

服装を正させつつ、咳払いをしてから俺は考えを述べることにした。

「そもそもだ、こんな脅迫イベントの何がハッピーなんだ」

「脅迫？」

「そりゃそうだろ。お菓子をくれなきゃいたずらするって脅してるんだぞ」

「脅してるって、それは言いすぎですよ」

「それはいじめっ子の考えだな」

「ふえっ!!? いじめっ子!?!」

「そうだ。そういうつもりじゃなかった、ちよつと強く言っただけだった。そういうのはな、強者の傲慢なんだよ。弱者は常に怯えて暮らしてるんだ」

「うう……なんか本気っぽい……」

「最初はお菓子をくれなきゃいたずらするかもしれないが、そのうち金を出さなきゃどうなるかわかってんだろ？ うなあといい出す」

「それはもうハロウィンじゃないですよ」

「同じような精神で行われているイベント、ということだろ」

また、それにかこつけて馬鹿騒ぎしたいだけの連中が集まるというのがまた嫌悪感を募らせる。民度の低いやつらが集まるから街も汚れるし、警備も大変だし、ろくなものじゃない。百害あって一利なしだ。こんなものをやりたがるのがすでに罪と言ってもいいだろう。

「ぐすつ……」

「えっ!?!」

待って、まさかこいつ泣いてるの？

「いじめとか、あたし大っ嫌いなのに。そういうの、ほんと嫌なのに。ぐすつ」

「ま、ま、ま、待て。別にお前がいじめをしているとか言っているわけじゃなくてだな」「ハロウィン一緒にしたら楽しいでしょ、ってそう思ってただけなのに」

「そ、そうだよな!? お前はみんなの幸せを考えて行動しただけだよな!」

「でも、独りよがりだったんですね。あたしがしてたのはいじめる側の考えなんですわ、や、やばい!」

何がやばいってこれはもう俺がいじめたのと同じ!

三浦の耳でも入ったら、「は? あくし、そういうのマジ許せないんだけど?」とか言われてものつすぎい顔で睨まれるに違いない。怖い! 怖いけど、カツコイ!

まあ、三浦の顔はやめなよボディにしな、的なことは起こらないにしてもだ。

男子高校生が女子中学生を泣かせるなんてことは、どう考えても許されるわけがない。仮に小町が同じ目にあわされたとしたら、絶対に殺す。社会的に。どんな陰湿な方法を使っても社会的に殺す。一色に金を払って美人局させてでも社会的に殺す。

そんなレベルのことを自分がしていると思うと、生きた心地がしない。早くなんとかしなきゃ!

「い、いや〜! こうしてよく見てみるとハロウィンってハッピーだよな。子供とかみんな笑顔だし! 参加者もお祭り気分楽しんでそうだし、こういうイベントは年に何回

あつても悪くないよな〜!？」

うつむいていた顔がこちらを向く。

涙の跡を拭うこともなく、潤んだ瞳で俺をまっすぐに見つめる。うう……

「ほんと?」

伏し目がちに、弱々しい声で、らしくない顔を見せるめぐみ。くつ、こいつがこんな顔をするなんて調子が狂うなんてもんじゃない。お前は常に満面の笑顔でいてくれなきゃこつちが困るんだよ。

「ほんと、ほんと! ハッピー! ハッピーハロウィン!」

びよこびよことお道化した動きをしつつ、なるったけ陽気に振る舞って言った。もうなりふりかまっていられん。

「……よかった」

ほんとに良かった。マジで良かった。こんなところを平塚先生にでも見られたらもうおしまいだよ? 泣かせたことをか、お道化したことをか? どっちもだよ!

「じゃあ、ハロウインをしましょっ♪」

「お、おう」

あれ? いつもの笑顔だね?ほんとに今泣いてた? なんかこう、涙が流れたわりには他が普通というかなんというか。まさか目薬だったってことはないよね? ない

よね？

「じゃあ、改めまして。トリック・オア・トリート♡」

は？

「俺？」

「そうですよっ」

「お菓子なんか持ってないけど」

「それじゃあ、いたずらするしかないですねっ♡」

い、い、いっ……。

やっぱり、いじめっ子じゃねーかよ……。

学園祭

「あ、結衣せんぱーい！ やっはろーです！」

「めぐみちやくん、やっはろー」

え？

なに？ すっかり仲良しなの？

「あれ、めぐみじゃん」

「あーしさん、こんにちは」

え？

あーしさんのこと、あーしさんって呼んじやってるの!?

三浦をそう呼ぶのは俺の脳内だけだと思ってたんだけど？

俺は妹の友達の神野めぐみに誘われて俺の高校の学園祭に来ていた。

え？ なにかおかしい？ おかしくないだろ。そもそも俺が学園祭に参加するほうがどうかしている。

そりやあ当然、事実上断れない理由がない状況でもなければ、参加するわけないだろ。めぐみは将を射んと欲すれば先ず馬を射よ、という言葉を知っているのか知らないの

かわからんが、外堀から埋める作戦をとったようだ。

要するに、以下のようだ。

「お兄ちゃん、めぐみちゃんと学園祭回るんだって？　まあ、小町はお姉ちゃん達がか

まってくれるからいいけど。ロリコンだね」

「先輩って、ほんと、あざとい後輩に弱いですよね……まあ、知ってましたけど、いくらなんでもロリコンですね」

「さすがだな、比企谷。君の言う本物、確かに見せてもらった……このロリコンめ」

と言った具合だな。俺はロリコンじゃない。むしろガハママの方が好みまである。

しかし、もう周囲が二人で参加することを認識している状態で俺がサボったらそれをみんなが許さないということだ。

俺と違ってめぐみは陽キャ、いやそれどころじゃないな。目に映るすべてのことは友達と言いつける彼女は太陽キャと呼んでいいだろう。もう見てたら灰になりそう。どうも、となりの吸血鬼さんです。

そんなわけで俺は自分の学校の学園祭であるにも関わらず、連れの中学一年生の女子のついでのような扱いだ。めぐみに連れ回されて回る学園祭はアウェイ感たっぷりだ。俺の学校なのにアウェイなの？　まあ俺からすればこの世界はすべてアウェイだけだね？

俺のクラスはどうやらメイド喫茶らしい。今の今まで知りませんでしたね？

俺の教室は机を合わせてつくられたテーブルがいくつか用意されており、俺たちは席に案内された。

「あ、ヒッキーもやつはろー」

「ヒキオもいたんだ。ほら、メニュー」

俺を認識するのに時間かかりすぎない？

まあ、そりやめぐみのような太陽がとなりになったら無理もないけどね？

しかし、このメイド喫茶という出し物を選んだやつは褒めてつかわす。由比ヶ浜も三浦も普段のビッチ臭がフアブリーズされて凄くいいですね！

「めぐみちゃん、何にする？」

「おすすめで！」

「じゃあ、紅茶セットだね」

こいつらどんだけ仲いいんだよ……。

普通、由比ヶ浜相手にそれほど信用できないだろ。

「ヒッキーは何食べるの？」

「お前が作ってないやつ」

「んもおおお！ 何それえ！」

「食えるものは食えるが、食えないものは食えないからな」

「食えるもん！」

「無理だろ……」

「無理なんだ……」

「どれに絡んだ？」

「ん、売り子だから調理は何もしてないよ」

「英断だ」

由比ヶ浜から必要な情報を聞き出した。どうやら死にはしないらしい。

心底安堵して、ほつと一息ついて水を一気飲みすると、由比ヶ浜は口を「いいつつ」とさせてお盆を胸に押し付けながら他所のテーブルに移動していった。

いや、今までの君の行いのせいだからね？

しかし、後ろ姿ですら絵になるな……。

「で、なんにすんの」

綺麗な縦ロールの髪を人差し指でみよんみよんさせながら言う三浦。金髪ロングに黒いリボンをつけ、メイド服を着こなした三浦のキアラの立ちっぷりが凄い。何かを思い起こさせる。

「パルフェかな……」

「は？ パルフエ？ パフェのこと？ なに、ヒキオつてスイーツにこだわりあんの？ キモ」

「いや、そういうわけでは」

「ふくん。ま、じゃチョコパフェいっちゃよね」

てくてことオーダーを承ってバックヤードに向かう三浦。

……いいですね……。メイド喫茶のあーしさん、凄くパルフエっぽいです……。

ようやくオーダーを終わらすことができ、一安心していると対面のめぐみはなぜか俺を睨んでいた。

「ぐぬうううう」

見れば顔を真っ赤にして、歯を食いしばりつつ、握り込んだ拳を机に打ち付けていた。

なに、なんなの？

「お、おにーさん……」

「な、なに？」

「仲、いいですね……」

は？

どこをどう見たらそうなの？

なぜか仲がいいのはお前らであつて、俺はアウェイなんだけど？ あまりにもアウェイ

イすぎてフライアウェイしそうなんだけど？

「正直、あたしはみんなともうすっかり友達だと思ってました……」

「どうみてもそうだと思うが……」

「こいつは何を言っているのだ？」

「でも、社会不適合者の超絶コミュ障のにおにーさんの方が全然仲がいいですよね」

「ちよつと？ 間違っていないけどそこまで言う必要なくない？ あと、お前らのほうが普通に仲いいだろう」

「誰がどう考えてもそうにしか思えないだろう。お前のことは「やつはろー」で俺は同級生なのに「も、いたんだ」だぞ。」

「お前の注文はあつという間……小説なら三行だ。俺なんて十行かかって結局注文できてないんだぞ？」 意思疎通の難儀さは一目瞭然だぞ？

「あたしのコミュニケーションなんてコンビニ店員と対して変わらないですよっ！ おにーさんは完全にお互いを知り尽くした関係性じゃないですかっ!？」

物は言いようだな……俺は由比ヶ浜に対して料理が絶対にできないという厚い信頼がある。そして三浦は俺のこととキモいと思っただらキモいと口に出せるくらい親しい関係ってわけだ。ポジティブにもほどがあるだろ。」

「つまり、めぐみもキモいと言われたいと」

「いや、あたしはキモくないからそれはいいです。本当のことを言い合えるってことで
す」

ほーん。

つまり俺がキモいことは真実なのね？ 本当のことなんて知りとうなかった。

「だから、そのー。おにーさん、あたしに言いにくかったけど言えなかったことを言っ
て
くださいっ」

そう来たか。

——これはキツイ。

言いたいことも言えないこんな世の中はボイズンかも知れないが、言えないから言わ
なかつたことを言えと言われる世の中はボイズンどころじゃない。

「おまちどうさま、めぐみちゃん。あとヒキオも」

しかもこのタイミングでメイド店員のあーしさんがチョコパフェと紅茶セットを運
んできた。やだ、聞かれたかしらん……。ってかやつぱり俺はついでじゃん……。

「じゃ、ごゆつくり。……ヒキオ、がんばんなよ」

あーしさん！ 優しい！ でも、励ますより聞いていないふりをして欲しかった！
でも頑張るね！

めぐみは紅茶を淹れている。俺はパフェを食べようとするが……よく考えたら俺が

パフェを食うこと自体恥ずかしくないか？　なんでこんな注文を？　三浦がパルフェっぽかったからですね。やっぱり俺はキモいのでは？

周囲を見回すと、三浦と由比ヶ浜、他に数人のメイド店員が俺の方を見て、噂話をしている。話題はパフェを食っててキモい件か、それともめぐみのセリフの件か。どっちもツライんですけど？

しかしこういうやりとりをめぐみとするのは何度目かだが、今回は煙に巻けないだろうな。

「うーん」

バナラアイスの溶けたところを長いスプーンでこそぎながら悩む。

めぐみは意外にも静かに紅茶を啜っている。にぎやかなのもらしいが、こういう姿もさまになるよなあ……。言わんけど。

「おにーさん、言いにくいことを言うだけですよっ？」

「いや、それ一番大変だよね……」

今まさに思ったけど言わなかったことがあるが……言うのは恥ずかしすぎて無理だ……。あーしさん、ごめんね、頑張れない……。

「お前はないのか、言えなかったこと」

卑怯な手だが、相手にボールを渡した。

めぐみはティーカップをソーサーに置くと、人差し指で頬をつんつんしながら、んと小首をかしげる。

「キモいとは思ってないですねえ」

「そりやどうも」

「うーん。そもそも嫌いなどころが無いんですよね〜」

「……そ、そりやどうも」

「ううーん。ううーん。その目付きが悪いところもあたし的には悪くないっていうか、結構好きだし……」

「っ……」

こいつ、わざとなの？ いや、天然なんだよなあ……。いい子だから友達がいっぱいいるんだよなあ。

「背が高くてスラツとしてるとか……誰が見てもそうですよねえ……」

おいおい、こいつが世界で一番俺を評価しちやつてるんじゃないの……そこまでじゃないだろっていう店なのに食ベログ5点つけちゃう人なんじゃないの……？

コーンフレークをほじほじしながら、めぐみがロールケーキを口に運ぶのを見やる。

……これなら言える、かな。

「めぐみ」

「? なんですか?」

「思ってたけど今まで言わなかったんだが……」

「はいはい! なんですかっ!?!」

待つてましたとばかりに、さっきまでロールケーキが刺さっていたフォークを振り回す。そういうの似合うね、キミ。

「お前、俺のこと結構好きだよな」

何でも無いように、努めて何でも無いように言った。パフェを食べるついでに。そういえば、とでもいうような言い方で。

「キモ」

「へ?」

「キモい、キモーい! おにーさん、それ、キモいですよー!」

めぐみは興奮した様子で、フォークをぶんぶん振り回す。ちよつと? 言いすぎじゃない?

それからめぐみは、紅茶やロールケーキを一口味わうたびに、「キモ」と言っていた。まるで「美味しい」の代わりに。

つたく、何がそんなに嬉しいんだか……。

俺はあまりにも卑怯な手を使って、自分の行為をひた隠しにして。

めぐみは俺に美辞麗句を言った挙げ句に、今度はキモいなんて最低の侮蔑の言葉を連発したのに。

俺たちは、この学園祭というハレの舞台において、誰よりも笑顔だった。

初詣

あけおめのスタンプを送ってきたと思つたらすぐに無料通話のコール音が鳴つた。まったく夜中だというのにうるさいことだ。年明けくらいは早く寝たつてバチは当たらないだろうに。もちろんそのディスプレイに映つた名前は神野めぐみ。他に相手などいない。

「おにーさんっ、初詣に行きましよう〜♪」

冗談ではない。このクソ寒いのに外に出るとか正気の沙汰とは思えん。そもそも俺はあけおめ声優大集合を見るのに忙しいんだ。

「初詣にいく必要はない。なぜならこの家には世界の妹として神になつた小町がいるからな」

小町を崇めておけば、世は全てこともなし。

あまりの信仰によつて妹のクラスシスターのサーヴァントとして英霊召喚されるまでである。

「え〜っ!? 女子中学生の神様なんていませんよっ」

いや、いるだろ。かみちゆとか知らないの？

「じゃあ、どこの神様のところに行くんだよ」

「あく、それはどこでもいいんですけど〜」

おい。バチが当たるぞ。だつたらうちの妹神でもいいだろ。

「そもそもですね、神様とか神社とかお寺とかそういうことは重要じゃないんです。初詣っていうイベントが大事なんですよ。ハロウィーンもクリスマスも全部おんなじなんですよつ。イベント！ イベントが大事！」

うわー。日本人つてのはどうしようもないね。いや、神野めぐみを日本人代表にするのはどうかと思うが。俺が言うのもなんだが結構変わつてると思うよ。なんでこいつに友達がいっぱいいいるのか不思議なくらい普通じゃない。いや、まあ本当に俺が言うのもなんだけど。

怪訝けげんな表情を見せる俺に、めぐみはなぜか自信満々で人差し指をぴこぴここと振る。

「いいですか？ おにーさんみたいなキモオタ向けのギャルゲーで考えてみてくださいよ。初詣でイベントCGが出てこなかったらどう思います？」

「クソゲーだな。絶対許さん」

「ほくらね？」

なんつということだ、一発で論破されてしまった。なんなの、意外と天才なの？ それとも俺が実はアホなの？

「というわけで、今すぐこちらに来てくださいねっ♡」

「いや、しかしだな……電車が」

「電車は終日動いてますよ」

「おいおい、働き方改革はどうなってるんだよ。年末年始から働くとか社畜にもほどがあるだろ。俺は絶対に家から出ないぞ。」

「あ、おにーさん、おまたせしました」

千葉市と足立区から明治神宮で集合しているのに俺が待つておかしいだろ。またしてもアウェイである原宿に俺を召喚しやがって。

「どうですか?」

「ま、イベントCGとしてはいいんじゃないかねーの」

「もつと褒めてもいいのに」

赤い晴れ着を着た神野めぐみは、それはもう可愛らしかった。住宅情報館のCMの橋本環奈を超えて二億年に一度の美少女じゃないかと思うくらいに。普段ポニーテールにしている髪をアップにしているとこも八幡的にポイント高い。言わないけどね?

「馬子にも衣装だな」

「えー! よくわかんないですけど頭良さそうな褒め言葉ですね」

お前のリアクションは完璧に頭悪いけどな。せつかくあえて褒めてないのに喜んでどうするんだ。ま、上機嫌な相手に間違いを指摘するのもアホらしいので、このまま神社へ行くことにする。

「寒いな。帰るか」

「帰りませんよ！ 逆によくここまで来て帰ろうと思いますよねっ」

だつて入り口まで来たけど全然神社見えないんだけど？ 何この広すぎる敷地。そのくせ人は多い。出店までいっぱい出ているようだ。

「ほら、ベビーカステラとか買いましょ」

「そうだな、猫の金玉みたいでカワイイからな」

「そうですねっ。おちんちんもカワイイけど金玉もカワイイですもんね」

「いや、ちんこは可愛くないだろ……」

「えー、合わせてあげてるのにー」

「いや、猫の金玉は誰が見たってカワイイだろ。うちの妹と同じで」

「小町ちゃんもその評価は嬉しくないと思いますケドね」

猫の金玉……じゃなかった、ベビーカステラを購入する。

紙袋を傾けてやると、めぐみは一つ取つてはむつと半分かじつた。ベビーカステラを一口で食べられないほど口が小さいのか、こいつは……。

俺は二つ同時に口に放り込んだ。金玉だからな。

うむ。甘いは正義。

「ふふっ」

「ん？ なんだよ」

晴れ着だからか、笑い方まで上品だな。きらびやかな袖を口元に寄せてはにかむように笑いやがって。普段ビッチ臭がするやつがそういうことをするとギャップ萌えしちゃうということをおわかってやっているのか？ だとしたら残念ながら大成功だからな？

「いや、美味しそうにベビーカーカステラ食べるなあ〜って」

「実際にうまいしな」

「ふふふっ」

「だからなんだよ」

「性格がひねくれてて目が死んでるのに甘いものが好きなんて、なんかカワイイなっつて」

「んな……」

「ギャップ萌えってやつですかね〜っ」

ギャップね。やつぱりギャップの効果はデカイね。目が死んでるから生きてるだけでギャップがあるしな。ギャップだよギャップ。

「いいから食べよ」

一つ口に含んでから、彼女の方に袋を向ける。

「ふふ、照れちゃって。カワイイなあ、おにーさん」

俺がカワイイとか、もはや辞書を書き換える必要があるだろ。馬子にも衣装と合わせてお前は言葉を勉強し直すべきだぞ。

「おにーさん、ワンバン食いつて知ってます?」

「ああ、餃子だっけ?」

焼き餃子をライスに一度バウンドさせるといふ食い方のことだろう。そうすると美味しくなるというのは正直なところ意味がわからん。論理的にロジカルシンキングで考えて欲しいね。

俺の脳内で玉縄が手をくるくる回している間にめぐみは、ベビーカーを一つつまんで、自分の唇で軽くキスをしてから、俺の口に放り込んだ。

何、何? こいつ何してくれちゃってるの?

「ワンバンするとめっちゃ美味いらしいですよ♡」

かーつ、俺の脳内の玉縄さんはもうお手上げ。ケンドーコバヤシもギブアップだ。

「あたしも食べたいなあ〜」

俺にそのこっぴどい恥ずかしいことをやれっていうのかよ。しかしまあ、俺ばかりがやられ

るというのもな。仕方がないので、俺もベビーカーカステラにそっと口づけて……そのまま食った。無理無理。これをめぐみに渡すとか絶対ムリ。

「ちよつと、なんで食べちゃうんですか〜！ くださいよつ」

ムーツとむくれるめぐみ。お前がやるならいいけど、俺がやっても可愛くねえつての。そんなことをやる俺のことを俺がキモくて耐えられない。はつきりいつて自分で自分を殺すレベル。

「ワンパン食いはちよつと旨すぎてお前にはやれん」

「へえ〜、そんなに美味しかったんですか。じゃあ全部やってあげますよ。んふふつ」
しまった。

言い訳が下手すぎたので、これはもう責任を免れない。

やむを得ないので彼女の唇にワンパンしたベビーカーカステラを一つずつ咀嚼した。

「お前はノーパンで食え」

「仕方ないですねえ」

俺ばかり食うわけにもいかないの、めぐみの口に放り込んでやる。一口だと大ききみたいだから、半分に分けてな。

「ノーパンでも美味そうだな」

「おいひーですよ。自分で食べるよりずっと」

「そうかよ」

俺はもうワンバンしてないベビーカーカステラなんて食べる気しないけどな。

食べ終わった紙袋をくしゃりと潰して、ポケットに突っ込んだ。

甘酒の匂いが漂ってくるが、もう甘さも暖かさも十二分に足りている。

ようやく賽銭箱が見える位置までやってきた。

「さて、二礼二拍手一礼だぞ」

「なんですかそれ？ ニレーニハクシユ？ ニレーさんに拍手ですか？ ぱちぱち」

「え、お前マジで言ってるの……？」

これが一色だったらドン引きするレベルだが、まあこいつは中学一年だし、知らないかもな。

「俺の真似してやればいい」

「ちよつと？ アイカツの悪口は許さないんだけど？」

「え、なにそれ」

「おにーさんのモノマネです」

「ええ……」

そんなこと言ってる俺？

アイカツの悪口は確かに許さないとしても、ちよつとショックですな……。

一応俺が一礼すると、めぐみも習って礼をする。うん、それでいいのよ。

がらんがらんがらん

がらんがらんがらん

うん、めぐみも鳴らしちゃったね。俺の真似をしろって言ったのは俺だから俺が悪い。まあそれぞれ神様を呼んだっていいだろう。

「で、ここで賽銭を入れる」

「お賽銭ですね」

俺が五円を入れようとすると、ばしつと奪われた。なんてことすんの、賽銭泥棒！

「あのな、五円はケチってるわけじゃなくて」

説明しようとする俺に、めぐみは頬を膨らませる。

「ご縁がありますように、ですよ。おにーさんにもうご縁なんて必要ないです」

あ、そう……。

「百円あげますから。五円を百円にしているんですから感謝してください」

「あ、ハイ……」

そう言われますと、おとなしく従うしかありませんね……なんだろう、強く出られたらめっちゃ弱いという特性、来年はなんとかしたいですね。

賽銭を入れて、二礼二拍手一礼。

「それで、目をつむって手を合わせるわけだ」

「へー。もうお願い事をしてもいいんですか」

「ああ」

感謝をするとか住所を言うとか色々あるみたいだが、そこまでしなくていいだろう。こいつの言っていたとおり、イベントで来ているだけだしな。初詣がそのまま今年最後のお参りになるような俺達は、そこまで真剣にやったら逆に失礼まである。

「来年も一緒に初詣できますように」

「……いい忘れたが、願い事は口に出してはいけないんだ」

「ええ〜。もう〜」

「すまん」

「すまんじゃないですよ。叶わなかったらどうしてくれるんですかっ」

「わかったよ。その願いは責任を持って俺が叶えるよ」

「……じゃあ、オツケーです♡」

目を開けずとも、めぐみの表情は手にとるようにわかった。

俺が願ったのは、来年ここに来たときに、もう一度こいつを笑顔にできますように、だ。

そして、今この瞬間を神様に感謝した。

お花見

夜中にいきなりさ、今何してるかも気にせず着信。

君とは、つい最近も話したばかりなのにどうしたの。

「おにーさん、お花見行きましようよ♡」

「あー、無理。花粉症だから。桜の」

どうも、初音島に行ったら憤死する属性の俺です。

俺の最大の敵は桜なんだよ。戦争といってもいい。これが本当のサクラ大戦なんですよ。

たとえそれが、くしやみと目のかゆみとの戦いであっても、俺は一步も引きません！

それが比企谷八幡なんです！

「ええー!? 桜の花粉症なんてあるんですか? スギならわかりますケド」

「あー、スギもなんだわ」

スギもダメなんて、ワイルドだろ〜?

ワイルドな俺は家から一步も出たくない。

「そんなこと言って、家から出たくないだけなんじゃ」

勘のいいガキは嫌いだよ……?」

「だいたい、花見なんて何が面白いんだよ。」

「海やプールなら水着。初詣なら晴れ着など、衣服チェンジがあるイベントなら需要はあるだろうが。」

「大人はわかるよ?」

「ありや宴会するための言い訳だから。なにか理由がないと一緒に遊びにも誘えない大人たちが、桜が咲いているから花見だ、一緒に酒のんで騒ごうやと。」

「つまりは口実なんだよ。ただの。」

「そういうイベントなわけで、酒も飲めない俺たちにメリツトはない。」

「それでも神野のようなリア充であれば、一緒に盛り上がるパーティーピーポ어의知り合いも多いただろう。」

「俺なんかより、もつとウエイイなやつらと行けばいいだろう」

「もう行きましたよ! 楽しかったです」

「ああ、そう……じゃあもういいだろう」

「初詣も花見も年に一回行けば十分だろ。」

「なんで俺なんか誘うんだか。」

「おにーさんをどこかデートに誘うのに、いい口実だと思ひまして」

「ぐぬ……」

なんでそういうこと平気で言っちゃやうの？

口実っていうのは口にしらないものなんだよ？

「あたしは理由なんていらねえんですけどお。先輩が欲しいんじゃないかって」

「俺は理由なく断れるんだけど？」

「桜の花粉症とかいうすぐバレる嘘までついてたの？」

はいはい、負け負け。

どうせこいつにや勝てないよ。

神野めぐみなら、どんな引きこもりが相手でも、いつか外に連れ出せる気がするね。

——次の週末。

俺はわざわざ都内の荒川河川敷までやってきていた。

「いやー、わざわざありがとうございますっ！」

「まあな。桜が散る前にいかなきゃならんしな」

「そうですねっ！」

いつもより神野めぐみはガーリーだった。

ガーリーというのはガーリー・エアフォースとは特に関係なく、なんか女の子っぽいという意味だ。女の子なんだから女の子っぽいって意味わからんが。

デニムのジャケットに、白いブラウス。花がらのスカート。まさに春のコーデという感じ。

「え？ そんなにカワイイですか？」

「何も言っていないんだけど？」

「ふふ。おにーさん、目がハートになってますよ？」

え？

ハート様には？

俺の目が「いてえよ」とか「ひでぶっ」とか言ってるの？

「おにーさん、またいつもの腐った目に戻ってますよ？」

そう言いながら、自然に腕を取るのやめてくれる？

こいつ最近、ぐぐつと色っぽさが増しているんだよなあ……。俺以外の誰かも、きつ

とそう思っている自信があるんだよなあ……。

「んふふ。またハートに戻った。おもしろい」

パチスロかな？ 俺の目はCRやはり俺の青春ラブコメはまちがっているじゃない

のよ？

ポニーテールをまとめるリボンはいつも柄が違っているが、今日の桜柄は非常に愛らしく、本物の桜よりもこの揺れる髪とうなじを見ていたいと思わせる。いつそヘブン

ズ・フィールの間桐桜を思わせるまでである。いや、いくらなんでもそこまで色つぼくはないだろ。あれは異常。

てくてくと歩いていると、めぐみは俺から腕を離してとてつと前に出て、こちらをむいて両手を広げた。

なに？ 空が広がるの？ ヒーローガールなの？

「ほら、ここから桜がよく見えますよっ?」

ほーん。

確かに、木ノ下までいかずとも、ここから川沿いに多くの桜が眺められる。

広がるスカイな神野めぐみの後方にな。

「まー、桜はあたしに夢中になりすぎて見えないかもですけどッ!」

べ、べつにそんなことないんだからねっ!?

春の女の子っぽい格好の女の子から、春っぽい女の子の香りがして花より女子おんなごとか思ってるわけじゃないんだからねっ?

この思考、実況の遠藤くんと解説の小林さんが見てたら恥ずかしさで死ぬな……。

「ほら、こうして河川敷の上から、ずっつと見える桜を見るだけでも、ステキじゃないですかっ?」

「そうだな……」

本当に花を見ているだけ。

騒ぐわけでもなく、歌うわけでもなく。酒も飲まず、メシも食わず。

大人数ではなく、たった二人で、遠くから桜を眺めるだけ。

本物の花見っていうのは、こういうことなのかもな。

土手に座ると、きらきらした川の水面と、桜の花びらを運んでくる風が心地よかった。

確かに、日本に生まれて桜が咲いているというのに、一人で家に引きこもってるのは勿体ないかもしれないな。

穏やかな気持ちになっていたら、突然めぐみがくねくねしながら、頭をぐりぐりし始めた。

「でもおにーさんが一人だったら、ただの不審者ですけどねッ。お花見じゃなくてお花覗き見です。お花ストーカー。きもきもきも〜」

なにこいつ？ イジってるの？ 何澁めぐみなの？

「まー、おにーさんはあたしが一緒にお花見してあげるつすよー!」

なにこいつ？ ウザい後輩なの？ 何澁めぐみなの？ 胸は（SUGOI USU

I）けど？

なんか参考にしようとしてるキャラを増やしすぎて迷走してないか？

今さら、二人でデートしてるのが恥ずかしくてごまかすためにキャラを演じてるわけ

でもないだろうしな……。

「なんですか?」

「いや……」

なんというか、俺が求めているのは、こういうめぐみじゃないというか。

からかい上手でも、イジってくる後輩でも、ウザい後輩でもない。

もちろん、コミュ障のめぐみでもない。

そんなものは、神野めぐみではない。

「普段のおまえってどんな感じだっけ」

「え? ん〜と。隣にいるのがサイツコーにカワイイあたしでよかったですねっ。お

にーさん♡」

「ああ。いいな。うん。それがいい」

「え? えっ?」

「いつもの神野めぐみが、俺はいいと思う」

「いや! いやいや! いつもそんな自分カワイイキャラじゃないですけどっ!」

「そうか?」

「そうですよお〜ッ」

「このやかましがちようどいい。」

一人だけで花見としても十二分に賑やかだ。

二人も三人もいたら、やかましくって仕方がないだろう。

「花見は、めぐみと二人でするのがいい」

「~~~~ツ!?!」

顔を真っ赤にしてから手で覆う彼女を見て、俺は何を言っていたのかに気づいた。

……たまには、静かに桜を眺める花見もいいかもな。

ユーチューバー

「始まりました〜、神野めぐみの、スーパーめぐみちゃんねる〜♪」

「おいおい、なんか始まつちやつたんだけど？」

「ばちばちばちばち〜」

「お前も手をたたけ、みたいな感じでウインクしてきてるけど？」

「もちろん意味わからないんですけど？」

「待って待って。いきなり何を始めちゃってるの？」

「え？ もちろんYouTubeですけど、なにか問題でも？」

「なにそのおぎやはぎみたいな反応。問題しか無いだろ」

「はあ〜」

露骨なため息を吐いて、ピカピカのiPhoneを触る。一旦録画を停止してくれたようですね。

「こういうのはノリでやつちやえばいいんだからさ〜。ここまで来て興奮ぎめするようなこと言わないでほしいんですよね〜」

なにそのセリフ。普通のビデオ撮影かと思ったらだんだんエスカレートしてきたことに文句言つたみたいな感じ。

え？ 俺、今からセクシービデオデビューするの？

「まさかとは思うが、そういう動画に出てないだろうな……」

「なんですかそういう動画って」

「いや……というかなんでYouTubeやってんの。今やるならTikTokじゃねーの。知らんけど」

「やってますけど」

「やってるんだ……」

「当たり前じゃないですかっ」

「当たり前なんだ……」

まあ確かに。やってないわけではない気もするな。

「で、YouTubeもやってるんだな」

「やってますよ！ っていうか、見てないんですか？ あたしのYouTubeを？」

見てねえよ……っていうか知らねえよ。

「おにーさんってキモオタすぎてViewerしか見てなさそうですもんね」

「ちよつと？ 息を吐くように問題発言するのやめてもらえろ？」

「当てたらパンチラ見えるかもですよお〜→」

「しょうがないちゃんと考えるか……。べ、別にパンチラとかはどうでもいいけどねッ
!？」

「しかし普通のユーチューバーって何やってんだっけ？ V T u b e rしか見てないからよくわからないな。」

「あれか？ 今流行の回転寿司屋で迷惑行為か？」

「ユーチューバーといえは迷惑行為だよな。うんうん。コレに違いない。」

「いや、違いますし……。おにーさんの部屋ですし」
「あつ……。ですよね……」

「本気で呆れた顔するのやめてもらえる？」

「真面目に答えた結果なんですけど？」

「しかしそうか、俺の部屋でやれることね……」。

「あー。男子高校生の部屋でえっちな本を探してみたー。みたいな」

「あつ、いいですねソレ！ やりましょうっ！」

「待って、俺のアイデアで俺を苦しめるのやめて？」

「自分で言っておいて……」

「むーっとむくれるめぐみ。」

持ってる本の女の子が、年下ポニーテイルばかりだとバレたらヤバいんだよなあ……。

「えつとだな……なんだ、お前のことだし、年上男子をからかってみた。とか？」
「んふふ。ほとんど正解ですっ」

両手で丸をつくるめぐみ。カワイイつもりなんだろうが、それだと紙パック式のでかくて安い日本酒のCMなんだよなあ……。

「しかし、なんだ。いいのか俺なんか一緒に映って」

好きなユーチューバーの女子を見てたら男が出てくるとか、軽くトラウマもんだろ……。彼氏いないはずのV Tuberがクリスマススイブとバレンタインの配信しないのと同じじゃない？ ショックなんだよなあ……。

「男の子もいっぱい出てますよ。あたし友達いっぱいいるんで」

「あ、そう……」

「おっ。じゃえらしー」

「ちげーよ」

「そうですか？ ふふっ」

俺はプライド高いぼっちなので、友達が多いことに嫉妬などしない。ぼっちちゃんにも感情移入しない。

「まあ、いままでののは友達ですけどねー。今回はカレシかもしれない雰囲気を出してアピールしていきますよっ」

「ねえ、それ俺の安全大丈夫そ？ 夜道で刺されたりしない？」

「引きこもりのくせにそんな心配するんですねー」

こりや一本取られたぜ。

俺だつて夜道くらい歩く。妹にアイス買ってこいって言われるとか、妹からポテチ買ってきてって言われるとか、妹に肉まん食べたいって言われたときとかな。

「じゃ、撮影再開しますねっ？」

なにがじゃあなのかわからないが。

i P h o n e が録画を始めちゃつてる。了承してないのに進行されるんだよなあ……。

「さて、今回の企画は自分のことを好きかもしれないと勘違いした非モテ男子を観察して遊ぼう、でーす」

うん、ほとんどあつてたけど、俺より辛辣なんだよなあ……。まあ、ユーチューバーなんてみんなそんなもんか。

目薬と間違えてラー油を渡してみたとか、どの指を折るのが一番痛いか悲鳴の大きさを測ってみたとかよりマシだと思つておこう。

「おにーさん、どうですかー。今日の服装は」

めぐみの今日の服装は、白いブラウスにピンクのベスト。そして白い短いスカートだ。はつきりいって一色が着てそうだなと思った。あざとかわいいフアッションだな……。

「そうだな……トウースって感じかな」

そのあと鬼瓦して、さらにカスカスダンスしちゃうまである。

「なんですかそれー!? 恥ずかしがってヘンなことというのやめてほしーです!」

ぶん、ぶん。

グーにした手をひとつずつ、頭にのっけて、おこのアピールだ。

一色が裸足で逃げ出すあざとさだな、こいつ……。

「目がとつくにハートになっててメロメロなのはわかってるんですからね!」

なにそれ、催眠アプリ?

俺、そんなことになってんの? インターネットの海に放流しちゃうまずくないですか

ね。

まあ、細くて活動的な脚が眩しいとは思いますがね……。

「おにーさん♡」

「お、おう……」

自分のベッドに二人で座つてるときに、左手をぎゅつと両手で握られる。

あのさあ……俺だから平気なもの、普通の男だったらもう好きになつてからな？
世の中の男は本当にチョロいんだから。

「これ、テロップとか入るの？」

「完全に好きになつてる、本当にチョロい男……みたいな感じですかねっ？」

「ほーん」

根も葉もないテロップ。なるほどねー。こうやってユーチューブ動画が作られていくわけか……。

「それにしても顔、赤すぎるんですけど？ それだとテロップつけるまでもないんです

よね」

「あまりにも撫ですぎなんだよなあ……」

「おにーさん、運動部でもないのに結構がつしりした手ですね？ 男っぼーい♡」

「よし、このドン・ペリニヨンってやつを頼もうかな」

「ドンペリはいりませーす！」

ペー。うっかりドンペリ注文しちゃったよ、ペー。めぐみキャバクラは危険すぎる。

「今度はこのポッキーを食べさせてあげます。はい、あーん」

「あーん」

マジでキャバクラなんじゃないか……？

好きかもしれないというより、ここはキャバクラなんじゃないかと思わせてるんだよなあ……。

「と思わせておいて、ちよつと食べちやう〜」

「あつ」

俺がポリポリ食ってるポツキーの、逆サイドをパクつと食べた。

うっかりキスしちゃう可能性のない、瞬間ポツキーゲーム状態。

「……」

「おにーさん？ どうしちやったんですかあ〜？ 目が泳いでますよ〜？」

くっ……。

「いや、あのさ。これ、自分のことを好きかもしれないと勘違いした男って企画だよな」

「非モテ男子です」

「そこはいいでしょ……」

「あははっ。ですよね？ おにーさんはちよつとモテますもんね？」

「……」

「冗談ですよ、冗談！」

「失礼なんだよなあ……」

「それで、企画がどーしたんですかっ？」

「いや、好きかもしれないっていうか、キャバ嬢にしか思えなくないか」

「えー？ キャバ嬢って好きかもしれないって勘違いさせるのが仕事じゃないですかっ」

「……なんかすまん」

「こえーよ。この女子中学生こえーよ。天性のキャバ嬢だよ。

「でも〜？ 企画がちよつと違うっていうのはそうかもですね」

「え？ そうなの？」

「はい。勘違いっていうところが違うかもです」

「え？ それって……」

「あははっ。おにーさん、いい表情してるう〜！ 100万再生されるかもですね！」

「え、いや、え？ え？」

「普段のユーチューバー神野めぐみ、どんだけ再生されてるの……？」

「こえーよ。神野めぐみ、こえーよ——！」